

第71図2は口縁部が内湾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口辺部に3段の帯状文を施す。瘤文を施す。帯縄文の間の文様は縄文施文後、横位沈線、弧状沈線の順に施文し、杵状のモチーフを描く。その後、杵内を研磨している。胴部以下には条線文を施す。約1/6の残存度である。

第73図3は括れ部を有し、括れ部から口縁部へかけて外傾気味に推移する形態の深鉢形土器である。口縁部に2段に帯縄文を施し、その直下に弧線文を施して磨消縄文とする。同図5、6なども同種の土器かも知れない。

第73図4～10は底部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる形態の土器と思われる。帯縄文や瘤文を施す。

第73図13～15は口縁部が強く内湾する形態の土器である。瓢形の深鉢形土器であろう。帯縄文間に刻みを施す。

### 第3類 (第71図4、第73図17)

安行2式の大波状口縁深鉢形土器を一括する。

第71図4は魚鱗状の波頂部に縦長の瘤文を施す。口縁部の帯縄文下には刻みを施す。三角形区画文の下位には斜位の沈線を施す。さらにその下位は横位沈線と弧状の縦位沈線により文様を構成する。括れ部に刻みが巡る。縦長の瘤文の施文後、縄文を施文している。沈線は横位、縦位(斜位)の順に施文され、その後には脈鼻状貼付を施す。約1/4の残存度である。第73図17も同種の土器である。

### 第4類 (第71図5、第73図18、19、22、27～31)

安行2式の平口縁深鉢形土器を一括する。いくつかのタイプの土器を含む。

第71図5は括れ部を有し、外傾気味に口縁部へと移行する。対の突起を4単位に施す。突起間には瘤文を施す。口縁部と括れ部に縄文帯を配し、その間を2条の斜沈線によって鋸歯状に文様を構成する。同時期の紐線文系土器と同様な構成をとっているのであろうか。胴部には条線文を施す。胴部下半を欠損する。

第73図18は直立気味に立ち上がる形態の土器であ

る。突起下に刻みのある縦長の瘤文を施す。口縁部に杵状の文様を施す。

第73図19、22は口縁部が内湾する形態である。19は横線間に刻みが巡る。22は刻みのある縦長の瘤文を施す。帯縄文下に刻みが巡る。帯縄文間には杵状の沈線文を施し、内部には矢羽根状沈線を施す。

第73図27、28は先の第71図5と同様な構成をとる土器であろう。縄文帯間の文様は弧状の沈線間に縄文を施すものと思われる。

第73図29、30は東北系の瘤付土器に類似する資料である。口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁部に刻文帯を配す。30の刻文帯下の文様は連結弧線文と思われる。31も東北系の土器であろうか。

### 第5類 (第71図3、第73図11、20、21、23～25)

後期安行式の精製深鉢形土器の胴部を一括する。

第71図3は括れ部に刻みが巡る。縄文を横位に施文する。第73図11は括れ部に刻文帯が巡り、胴部に弧線文による磨消縄文を施す。安行1式である。20は大波状口縁深鉢形土器の胴部である斜位の沈線、縄文帯、刻み、貼付文を施す。安行2式である。

第73図21、23～25は縄文帯と刻みを施す。21は括れ部直上に杵状の沈線を施し、縄文を施文する。24は地文縄文上に曲線的な沈線を施す。25は括れ部に2列に刻みを施し、胴部に粗い縄文と沈線文を施す。

### 第6類 (第73図12、16、26、32、33)

後期安行式の精製土器のうち深鉢形土器以外の器種を一括する。

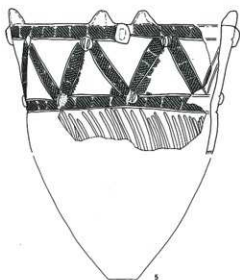
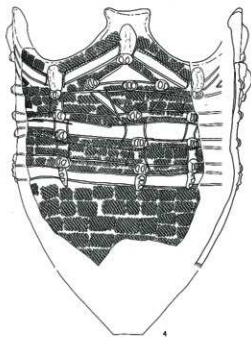
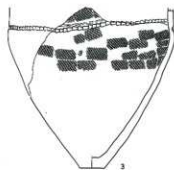
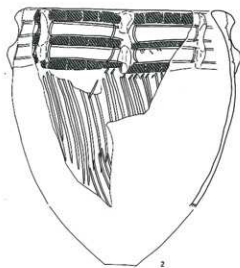
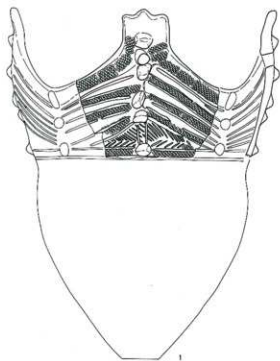
第73図12は帯縄文を施す安行1式の浅鉢形土器である。16は台付鉢形土器の台部である。刻文帯と瘤文を施す。安行1式である。26は縄文帯下に弧線文による磨消縄文を施す浅鉢形土器である。安行2式であろうか。32は注口土器の注口部、33は注口土器の底部である。

### 第7類 (第74図1～15)

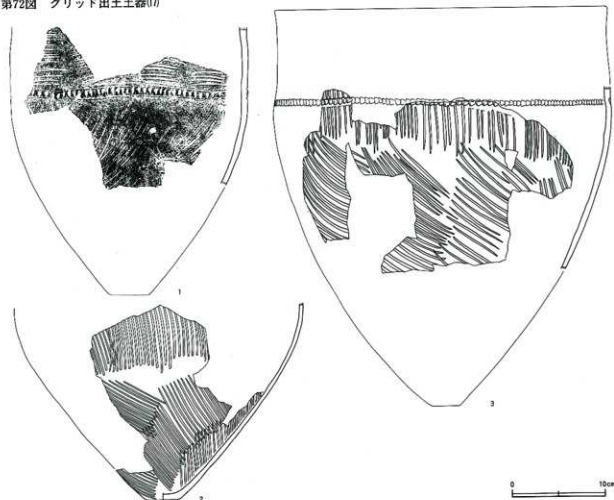
晚期安行式土器の精製土器を一括する。

第74図1は波状口縁深鉢形土器である。口縁部に沿って刻みと沈線を施す。波頂部に脈鼻状貼付文を施

第71図 グリッド出土土器06



第72図 グリッド出土土器⑦



す。2は口縁部が直立気味になる浅鉢形土器である。口辺部にステッキ状の沈線による文様を施す。この文様部分を磨消部として縄文を施文する。体部に隆帯を施す。3は口縁部が内湾する深鉢形土器である。口縁部にステッキ状の沈線を施し、縄文を施文する。1～3は晩期前葉の土器である。

第74図4～15は安行3C式であろう。

第74図4～7は沈線文のみを施す。4は口縁部が直立気味に立ち上がる形態で杵状の沈線を施す。

第74図5～7は口縁部が外傾気味になる形態の土器である。5は横線と斜沈線、6は横線、7は弧線文を施文する。

第74図8は口縁部が直立気味に立ち上がる単純な形態の土器である。斜位の沈線間に細密沈線を施す。

第74図9～15は沈線間に列点文を施す土器である。9は外傾する口縁部に弧線文を施す。10は胴部の破片

である。曲線的な沈線を施す。11も胴部の破片で、横帯区画と弧線文を施す。

第74図12は胴部から内湾気味に推移し、無文の口縁部が直立気味になる形態である。紐線文系の流れを組む土器で横帯下に縦位の弧線文を施す。

第74図13は胴部が張り、口縁部が外傾する形態の土器で横位の「S」字状沈線、弧線文を胴部に施す。

第74図14、15は外傾する口縁部に文様を施す。弧線文内に2列に列点文を施す。

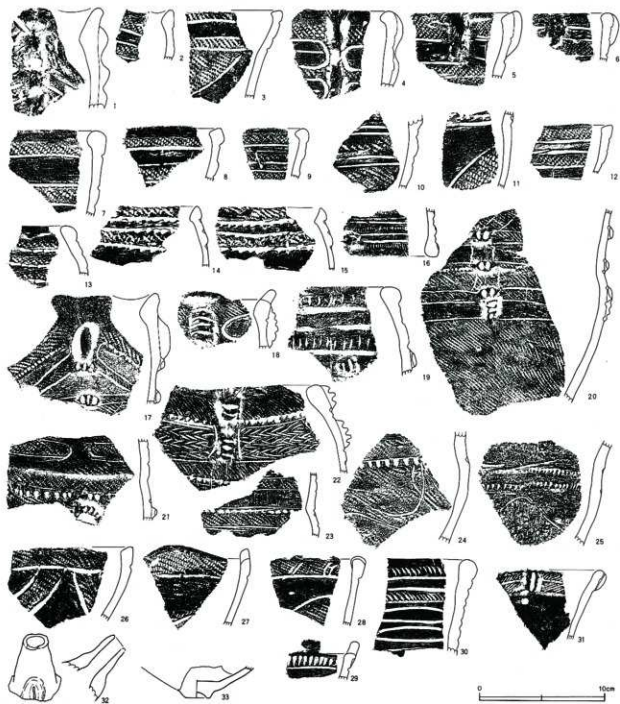
#### 第8類 (第72図、第74図16～35)

安行式土器の粗製紐線文系土器を一括する。

第72図1は口辺部では横位、刻文帯以下では斜位に糸線を施す。2、3は胴部上半では縦位、下半は斜位に糸線を施す。いずれも後期に属する。

第74図16～28は口縁部が直立ないし、やや内湾気味に立ち上がる形態である。口縁部に刻みや沈線が巡る。

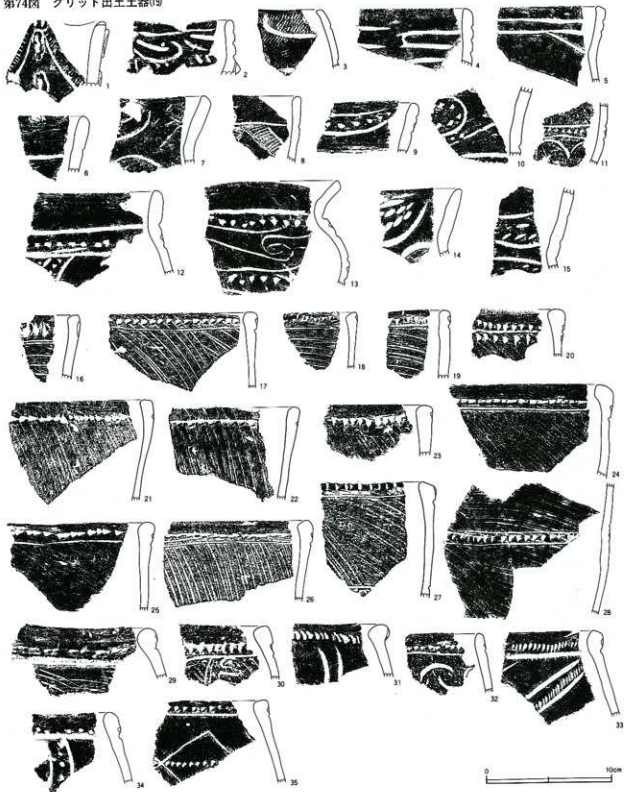
第73図 グリッド出土土器⑧



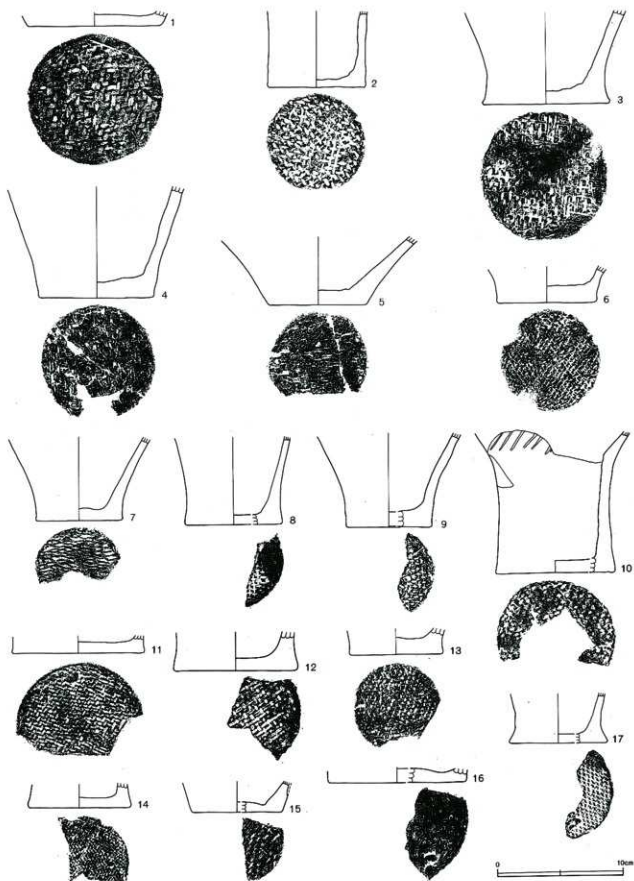
29、30は口縁部が内湾する形態で、地文に条線を施す。30は口辺部に弧線文、蛇行沈線を施す。31～35は口縁部が内湾する形態で、地文の条線がないもの。口辺部には弧線文、斜沈線等を施す。16～30は後期、31～35は晩期の所産と思われる。

第75図、第76図には深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形の底部を一括した。第75図、第76図1～7には各種の網代旗が残されている。

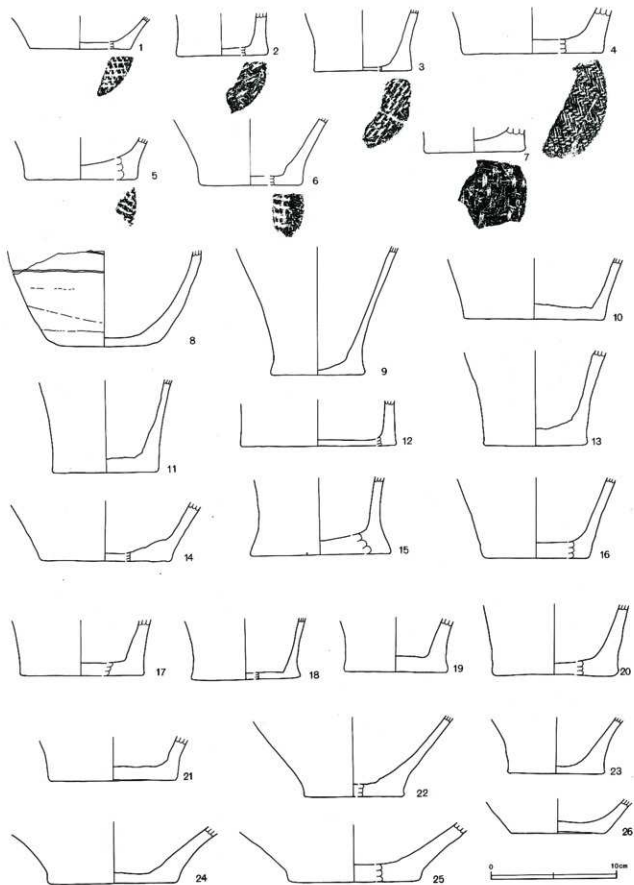
第74図 グリッド出土土器(9)



第75図 グリッド出土土器・底部(1)



第76図 グリッド出土土器・底部(2)



## (2) 石器 (第77~84図 第6表)

住居跡以外の土坑や柱穴などの遺構、及び包含層から出土した石器を一括して、器種単位に観察事項を説明する。

### 石鏃及び未製品 (第77図1・3・5~13・15)

6がチャート製、あとはすべて黒曜石製である。5のみが平基で、調整が終了したと考えられる残りの石鏃は凹基である。製作技術面の特色が二点考えられる。

一点目は、一次的な押し剥離面を残し、調整剥離が粗めのもの(1・3・10)、二点目は、素材の主要剥離面やネガティブな素材自体の剥離面を残し、その周縁を細かく調整剥離を施して仕上げているもの(5・6・7・8・12)。11・13・15は未製品である。特に15は、凹基石鏃の製作課程を窺い知る恰好の資料であろう。主要剥離面のバルブを除去した後に、脚部作出のための剥離を施し、その後に側縁の押し剥離を加えた様子が看取できる。

### 楔形石器 (第77図16~19)

4点ともにチャート製である。いずれも打面部を残し、側縁を調整加工することで下端を刃部になっている。共通して細かな刃こぼれが認められる。

### 掻器様石器・削器 (第78図1~3)

1は硬砂岩製の扁平な素材を利用している。正面の刃部作出は粗雑である。裏面の刃部はローリングによって磨滅しているが、使用による細かな剥離が右側縁まで看取できる。2・3は軟質な緑泥片岩製。粗い一次加工後正面右側縁に小さな二次調整剥離を施すことで刃部に仕上げている。

### UF (第78図4)

チャート製。打面に原石面を残す縦長剥片である。バルブを除去した形跡があることと、使用の結果と判断できる正面左側縁の剥離が見出せることなどにより used-flake と考えられる。楔形石器の可能性もある。

### 石鋸様石器 (第78図5)

軟質の石英片岩製。正面の先端から左側縁中心に調整加工を施し、先端を尖鋭にしている。左側縁上部には摩擦による鈍いつぶれが看取できる。右側縁は剥落

したものと考えられ、修復の加工が未終了のまま残る。

### 軽石 (第78図10~21)

Eグリッドでの出土が目立っている。加工痕や擦痕などが確認できるのは11の擦痕ぐらいい、あとは見た目に判断はできない。

### コールタール (第78図22・23)

2点ともEグリッドII層から出土した。コールタールを使用した関連遺物は見当たらない。出土事実として取り上げておく。

### 打製石斧 (第79図1~13)

出土した打製石斧の多くが分銅形で、4のみが軟質の石英片岩製だが、あとは硬質の素材を使用している。石斧としての原形を止めるのは3・4だけで、ほとんどが欠損している。欠損した石斧のうち8・9・13のように別の機能へ転化し、利用したと考えられる例が認められる。これらの石器は、第3号住居跡から出土した石斧(第37図8)のように、砥ぐ機能を有したと考えられるもの(8・9)、斜辺を再加工して掻器様石器にしたもの(13)などがある。

### 磨製石斧 (第79図14)

玄武岩製。刃部から両面にわたって大部分が欠損している。欠損後に鋭くなった下端辺を使用した可能性が考えられる。小さな剥落が認められる。

### 有溝砥石 (第80図1~7)

片面または両面に溝状のくぼみを残し、擦痕が認められるものを本器種に分類する。

1は緑泥片岩製。表面に凹部を残し、その上と左に二条の溝が、裏面にやはり二条の溝がともに上下方向に認められる。裏面左側縁から先端にかけて鋭い痕らしい剥落が認められ、砥石との複合石器の可能性もあるだろう。2は砂岩製で被熱赤化している。上部を欠損し、表裏に上下方向の一条の溝がある。下端部は両面ともに小さな擦痕が認められることから、溝となった部位と同様に砥ぐ行為が実施された部位であろう。3は砂岩製。上部部は折断後に研磨した形跡を残す。下部部は欠損している。表面に二条の溝が、裏面に



粗い砂粒子が露出し、不規則な溝が認められる。正面右側縁はノッチ状に抉れていて擦痕が看取できることから、かなりの強圧で対象物を研いだことが想定される。4は砂岩製で被熱赤化している。表裏面に浅い溝が認められる。全面にわたって擦痕が看取でき、原形が消失してからも再生し、縁辺部を中心として機能していたことが想定される。5は安山岩製。磨石か敲石の転用と考えられる。表面中央に一条の溝が上下に、先端部斜めには、欠損部位の剥離縁を利用したと思われる左上がりの五条の小さな溝も認められる。6は砂岩製で被熱赤化している。2と同じような特徴を有している。7は砂岩製。約半分が欠損しているものと考えられる。両面に幅広い溝が認められる。その擦り減り具合から玉砥石と考えるのが妥当かもしれない。

特色の一点目は、欠損石器を再利用している様子が窺えること。二点目は、7以外は置き砥石とは考えにくく、手に持って程よいほどの形態であること。三点目は、他器種との併用か他器種からの転用が考えられるものがあること。四点目は、被熱傾向が認められるものが目立つこと。五点目は、素材が砂岩主体であること。

一点目に関しては、今次調査全体を見渡しても砥石の類で完形といえるものは極めて少なく、折断か大きな打削によって器種としての形態が整えられ、再利用されている様子を窺い知ることができ。有溝砥石では折断が目立っている(1~4・6・7)。このことは二・三点目のことと関連しているものと考えられる。四点目の傾向は2・4・7に顕著である。

所属時期は、5が第30号土坑からの出土したことから晩期安行3C式期と考えられ、それ以外は後期中葉の加曾利B式期にほぼ該当するであろう。

#### 砥石 (第80図8~第81図3)

研磨痕が明らかに認められ、主体的に他器種と認定できない石器を本器種に分類する。

8・13は砂岩製で被熱赤化している。明確な溝は確認できないが、有溝砥石と相似た残存形態が認められる。使用部位は有溝砥石と異なり、斜位に研磨による

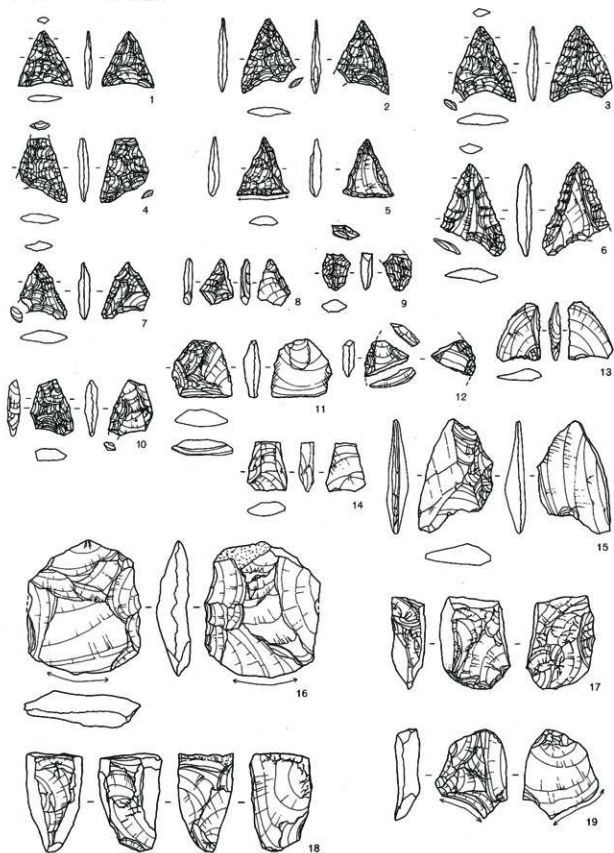
擦痕が看取できる。13は全面にわたって擦痕が顕著である。9・10は砂岩製で、細長い形状の素材を意図的に用いて両端部主体に使用されたと考えられる砥石である。14・16も同じ性質のものであろう。11は砂岩製で被熱赤化している。被熱原石を分割した判片を使用し、砥石として完成させている。原石側には横位の擦痕が認められる。左側縁上部には抉りがあり、裏面の剥離面は磨減している。第80図3の有溝砥石と同様な機能を有していたものと考えられる。12・17は素材は違うが、被熱赤化した部位を使用しているところに共通点がある。15は砂岩製で被熱赤化している。表面下部に研磨整形痕と使用擦痕が認められる。18・19は硬砂岩製で被熱赤化している。18は両面に斜位に連なる点線状の細かな溝が看取できる。19は上下端と正面右側面ともに折断と打削後に小さな剥離面を作出し、その面を作業面として研磨した形態が窺える。第81図1~3の砥石はAグリッドの晩期包含層から出土したものである。形態や1の石材などから後世の混じりと考えられる。

第80図8~19の砥石の所属時期は、9・10が晩期安行3C式期の土坑からの出土していることから該期と考えられるが、第32号土坑は土層と土器が混乱した状態にあり、9は確定できない。それ以外は、石器製作技術面で有溝砥石と相似たところがあり、加曾利B式期を中心に捉えて大過ないものと考えられる。

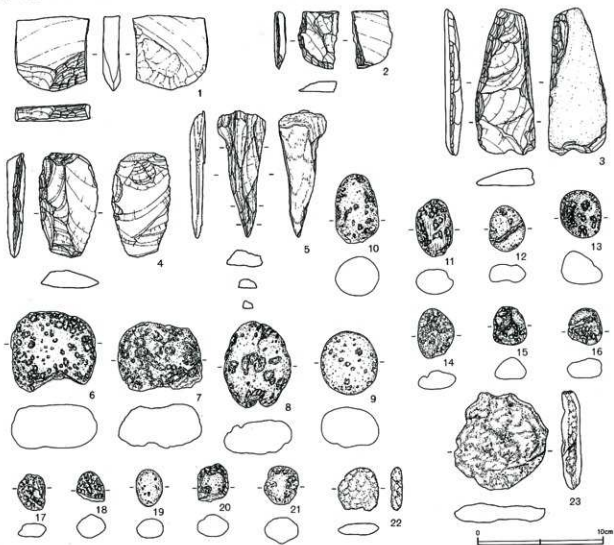
#### 石皿 (第81図4~11)

4は多孔質安山岩製。表面に直径7cmほどの深い凹部が、裏面に二つの小さな凹部が残る。表裏で使用形態が異なっていたものと考えられる。5・6は輝石安山岩製。大部分が欠損しており原形は不明であるが、受け皿部分が広いものであろう。7・11は硬砂岩製。表面全体と表裏の折断縁辺の一部に強い擦痕を認めることができる。その特質から砥石の可能性も考えられる。表面は被熱していると思われる。8・9は分厚な石皿の一部が残存したものである。10は石皿のほぼ中央にあたる一部が残存したものである。8・9が晩期、それ以外は加曾利B式期を中心に捉えて大過ないものと

第77図 グリッド出土石器(1)



第78図 グリッド出土石器(2)



考えられる。

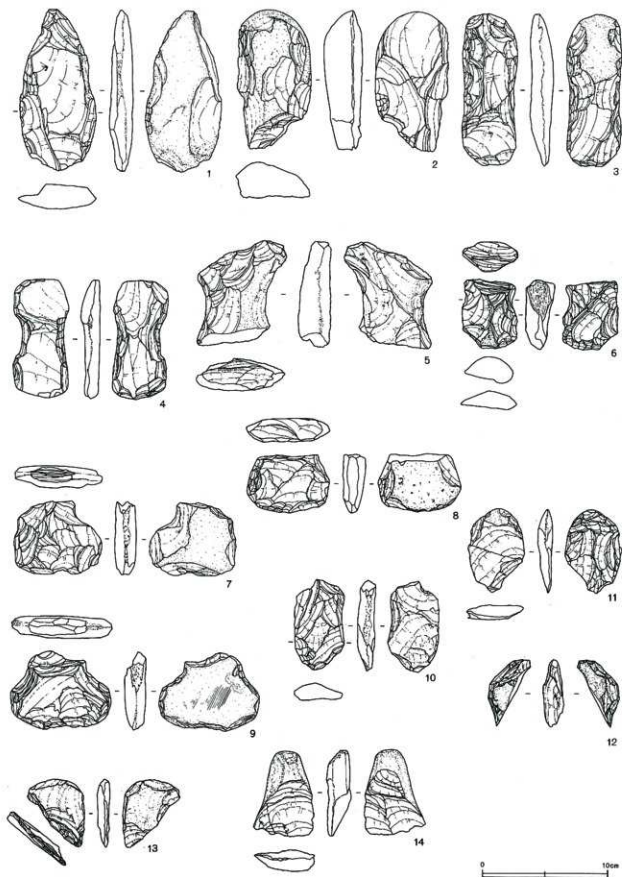
磨石 (第82図)

いずれかの面に縦位、または横位に磨面を確認できる石器を本器種に分類する。

1～3は砥石に使用する素材を使用し、砥石的な機能が想定されるものである。1は卵形、2・3は扁平気味である。1・3が熱を受けている。研磨の痕跡はわずかしか確認できない。4～12・14が磨石らしい形態と使用痕跡を残している。完形で残存したのは4のみで、被熱赤化し、全面が磨面として使用されている。他はすべて欠損している。9・10を除いて磨面の擦痕が看取できる。5は欠損部縁辺の磨耗が表裏ともに顕著であり、二次的に砥石に転用されたことが想定され

る。これらの磨石の原材は、砂岩や安山岩系が目立っている。13は軟質の石英岩片製。上端から右側縁にかけて擦痕が認められる。周縁に敲打痕が巡っており、敲く機能を併用していたか、敲石の転用であろう。15～17はいずれも大きな素材から成り立っていたものである。原材は砂岩や安山岩系である。被熱赤化している。広い磨面があることと打削の縁辺や剥離縁に磨滅が認められる共通点がある。なかでも15・17は擦痕が明確に剥離縁に認められる。砥石との併用が考えられる。転化の可能性も一考の余地があるだろう。4・10は晩期安行3C式期、それ以外は加曽利B式期を中心に捉えて大過ないであろう。

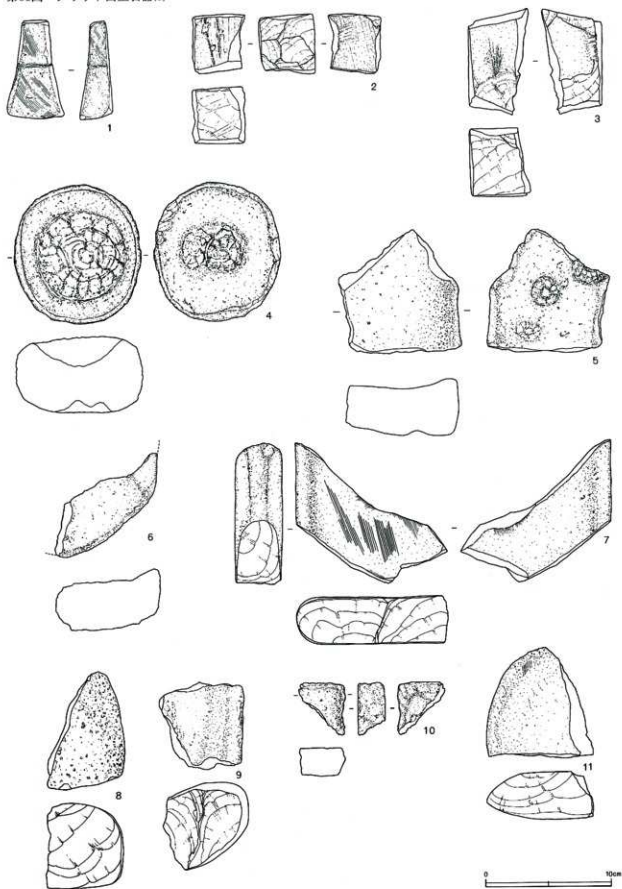
第79図 グリッド出土石器(3)



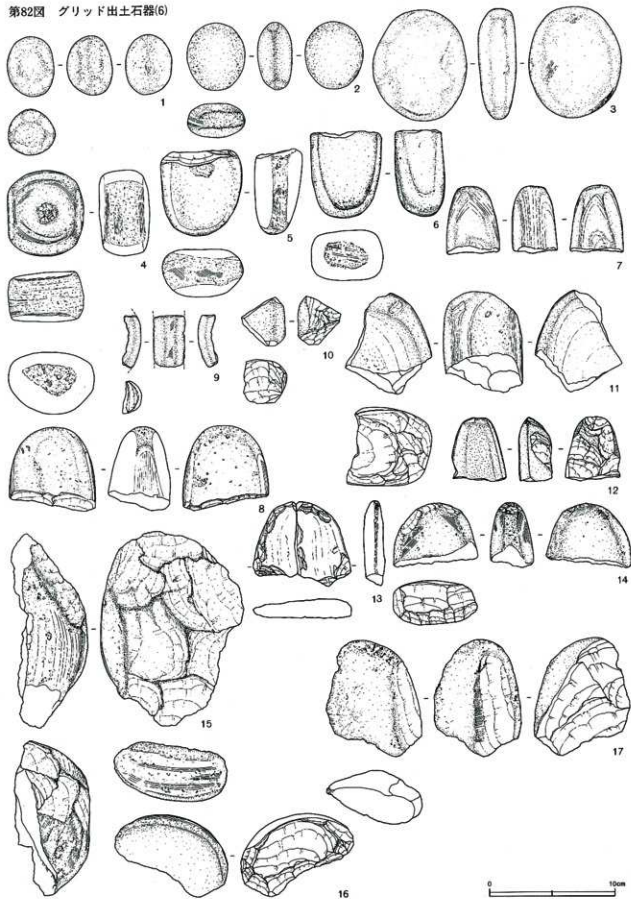
第80図 グリッド出土石器(4)



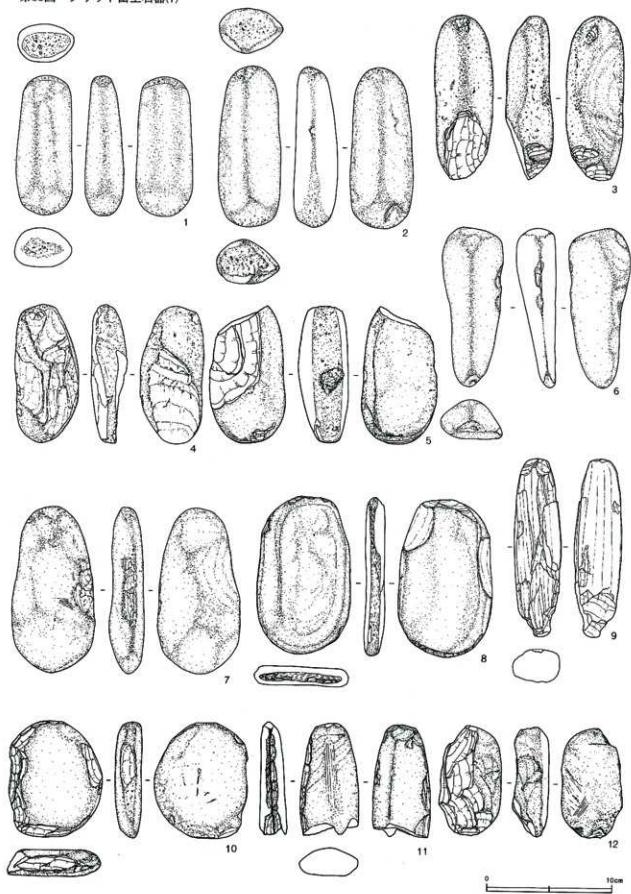
第81図 グリッド出土石器(5)



第82図 グリッド出土石器(6)

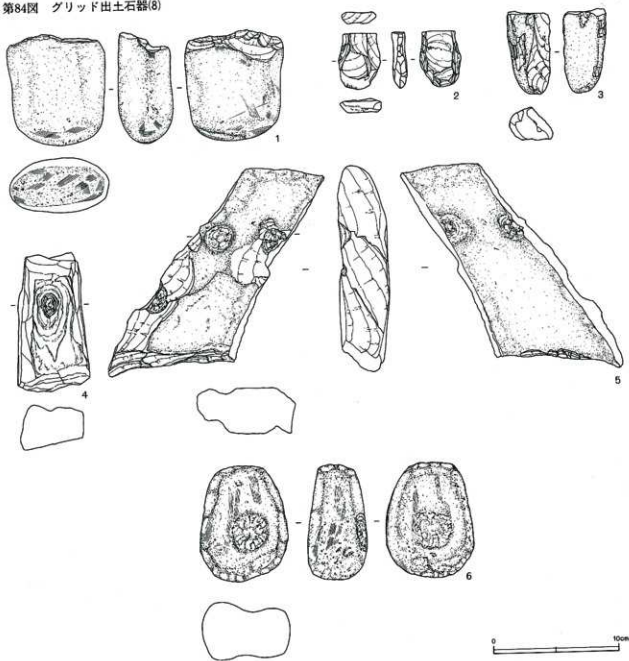


第83図 グリッド出土石器(7)





第84図 グリッド出土石器(8)



敲石 (第83図～第84図3)

上下端か、そのいずれかに敲打痕が認められる石器を本器種に分類する。

形態的にはやや厚みをもつもの(1・6・9・12・第84図1)、扁平気味のもの(7・8・10・11・第84図2・3)の二つに分けられる。長軸の上下端か、その一方を敲打面にしている。8・9が軟質な片岩系の石材を使用している以外は、砂岩系や安山岩系の石材が目立っている。6・12は敲打痕と擦痕が認められ、砥

石との併用が考えられる。11は下端部を欠損し、左側縁側と上端の表裏両縁に敲打痕が、正面一端から縦位に擦痕が看取できる。同じく砥石との併用か転用が想定される。第84図1は敲打痕以上に擦痕が目立っている。下端部と側縁、裏面は顕著である。また、欠損部縁にも斜位に擦痕が看取できる。これらの使用痕の様子から、敲石として使用した後に磨石と砥石に転用したことが想定される。

第6表 グリッド出土石器観察表

神園番号	器種	出土地点・層位	石質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	特記事項
第77図	1	石 鏃 D-2-3	黒曜石	1.5	1.4	0.2	0.33	
	2	石 鏃 SX1	チャート	1.97	1.45	0.25	0.5	凹基
	3	石 鏃 D-2-3	黒曜石	2	1.65	0.31	0.68	凹基
	4	石 鏃 SX1	黒曜石	1.7	1.28	0.26	0.47	凹基
	5	石 鏃 E-2-3	黒曜石	1.5	1.36	0.26	0.38	平基
	6	石 鏃 P156	チャート	2.45	1.75	0.39	0.98	凹基
	7	石 鏃 D-2-3 II層	黒曜石	1.55	1.22	0.33	0.37	凹基
	8	石 鏃 E-2-3 II層	黒曜石	(1.2)	(0.9)	(0.24)	0.16	凹基 未製品
	9	石 鏃 D-2-3 II層	黒曜石	0.95	0.75	(0.32)	0.19	凹基 未製品
	10	石 鏃 D-2-3	黒曜石	(1.5)	(1.15)	0.32	0.5	凹基 未製品
	11	石 鏃 D-2-1 II層	黒曜石	(1.5)	(1.6)	(0.47)	1.02	未製品
	12	石 鏃 E-2-3 II層	黒曜石	(0.9)	(1.2)	0.34	0.27	凹基 未製品
	13	石 鏃 E-2-3 II層	黒曜石	(1.5)	(1.5)	(0.31)	0.42	凹基 未製品
	14	フレイク E-2-3 II層	黒曜石	1.25	1.1	0.4	0.5	
	15	石 鏃 D-2-3	黒曜石	3	2.95	0.56	2.25	凹基 未製品
	16	楔形石器 C-1-4 I層	チャート	3.6	3.1	0.92	9.7	
	17	楔形石器 E-2-3	チャート	2.5	1.85	0.87	4.87	
	18	楔形石器 SK5	チャート	2.6	1.7	1.5	7.27	
	19	楔形石器 SK31	チャート	2.4	1.9	0.7	2.49	
第78図	1	搔器様石器 F-2-1 II層	硬砂岩	(5.9)	6	1.36	72	
	2	削器 E-2-1 攪乱	緑泥片岩	4.6	(3.2)	0.85	15	
	3	削器 E-2-1 攪乱	緑泥片岩	11.6	4.6	1.38	75	
	4	U F E-1-2 攪乱	チャート	8.3	4.7	1.4	57.67	
	5	石筈様石器 F-2-1	石英片岩	10	3.85	1.26	39	刺突具
	6	軽石 E-2-1		(6.4)	6.8	3.42	49.05	
	7	軽石 E-2-3		(5.4)	6.7	3.5	35.01	
	8	軽石 D-2-1		6.8	5.3	2.7	23	
	9	軽石 E-2-1		5	4.5	3.2	18.81	
	10	軽石 E-2-3		5.5	3.4	3.1	17.43	
	11	軽石 SK3		4.5	2.9	1.94	7.18	
	12	軽石 D-2-1		3.6	2.9	1.5	4.34	
	13	軽石 E-2-1 II層		3.8	3.2	2.62	7.31	
	14	軽石 D-2-1		3.9	2.9	1.47	3.71	
	15	軽石 E-2-1 II層		3.1	2.7	1.62	3.64	
	16	軽石 SK3		(2.9)	2.7	1.56	3.64	
	17	軽石 D-2-1		2.9	2.2	1.05	1.62	
	18	軽石 E-2-3		(2.4)	2.3	1.85	1.81	
	19	軽石 E-2-1		2.9	2.1	1.48	1.89	
	20	軽石 E-2-3		(3.0)	2.5	1.72	3.05	
	21	軽石 E-2-3 II層		3	2.8	2.05	3.78	
		軽石 D-2-3 II層		(1.9)	(1.38)	(1.04)	0.88	大部分欠損
	軽石 E-2-3		(2.46)	(1.9)	(1.1)	1.03	大部分欠損	
	軽石 表探		1.7	0.88	0.68	0.26		
22	コールドール E-1-2		3.4	3.2	0.9	5	凹形物	
23	コールドール E-2-1		(7.7)	(7.5)	1.58	61	凹形物	
第79図	1	打製石斧 北側包含層	安山岩	12.67	6.11	1.9	159	被熱 試掘出土
	2	打製石斧 E-2-3	凝灰岩	(11)	(5.83)	3.05	209	
	3	打製石斧 F-2-1 II層	硬砂岩	12	4.4	1.9	138	分銅形

採回番号	器種	出土地点・層位	石質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	特記事項	
第79回4	打製石斧	D-2-3 II層	石英片岩	9.4	4.4	1.48	75	分銅形	
	打製石斧	A-2-3	ホルンフェルス	(8.3)	7.05	2.5	150	分銅形	
	打製石斧	E-2-3	安山岩	(5.45)	(4.4)	2.35	55	分銅形	
	打製石斧	E-2-1 攪乱	粘板岩	(5.8)	6.9	1.79	91	分銅形	
	打製石斧	E-2-1 II層	花崗岩	(4.6)	6.6	1.85	75	分銅形 剥離縁に擦痕	
	打製石斧	C-2-1 攪乱	粘板岩	(6.2)	8	1.74	109	後に砥石として利用	
	打製石斧	F-2-1 II層	ホルンフェルス	7.2	4	1.38	44	分銅形	
	打製石斧	F-2-1 II層	安山岩	(6.6)	(4.5)	1.13	31		
	打製石斧	SK30	ホルンフェルス	(5.3)	(3.3)	1.68	23		
	打製石斧	F-2-1 II層	粘板岩	(5.4)	(4.6)	0.98	22	スクレイパーの要素あり	
	磨製石斧	E-2-3	玄武岩	(6.7)	(4.9)	(1.93)	46		
	第80回1	有溝砥石	SK34 下層	緑泥片岩	(6.7)	5.3	1.49	70	敲く・磨く複合石器
		有溝砥石	F-2-1 II層	砂岩	(5.9)	4.1	1.02	30	被熱
		有溝砥石	E-2-3	砂岩	(5.3)	(5.1)	(1.5)	42	
有溝砥石		C-2-1 II層	砂岩	5.4	3.6	1.8	29	被熱 剥離縁も研磨	
有溝砥石		SK30	安山岩	(4.8)	5.8	2.9	79	被熱 磨石か敲石の転用か	
有溝砥石		SK17	砂岩	(2.9)	3.9	0.98	12	被熱	
有溝砥石		D-2-3 II層	砂岩	(9.5)	(6.32)	1.8	122	被熱 玉砥石か	
砥石		D-2-1 II層	砂岩	(4.35)	(4.3)	1	20	被熱	
砥石		SK32	砂岩	(5.2)	2.7	1.58	20		
砥石		SK30	砂岩	7.9	1.95	1.74	39	被熱 敲石と複合	
砥石		E-2-3 II層	砂岩	6.85	3.47	1.8	32	被熱	
砥石		F-2-1	硬砂岩	9.31	4.79	3.2	133	被熱 剥離縁も研磨転用	
砥石		E-2-3 II層	砂岩	6.1	4.8	1.42	42	被熱	
砥石		E-2-3	硬砂岩	(6.2)	3.3	2.6	88	被熱 転用	
砥石		E-2-3 I層	砂岩	4.78	5.54	1.96	60	被熱	
砥石		E-2-1 II層	砂岩	(2.7)	(2.17)	1.95	9		
砥石		E-2-3	輝石安山岩	6.9	6.2	3.7	210	被熱 敲石と複合	
砥石		A-2-3	砂岩	9.5	6.12	1.85	145	被熱	
第81回1		砥石	D-2-3	硬砂岩	14.1	7.03	13.1	370	被熱 敲石と転用
	砥石	A-1-4	堆積岩の一種	7.85	4.6	2.62	75	撥形	
	砥石	A-2-1	輝石安山岩	(4.7)	(4.2)	4.52	130	被熱 煤の付着 折断面利用	
	砥石	A-2-3	安山岩	(8.4)	(4.8)	5.38	310	全面被熱 煤の付着 折断面利用	
	砥石	F-2-1	石英黒雲母安山岩	(11.7)	(7.2)	(4.5)	340	被熱	
	石皿	D-2-1	多孔質安山岩	10.9	10.07	5.97	660		
	石皿	E-2-3	輝石安山岩	(9.7)	(9.8)	(4.36)	333		
	石皿	SK27	輝石安山岩	(8.2)	(8.2)	(4.7)	155		
	石皿	SK29	硬砂岩	(11.1)	(12)	3.75	460	砥石か 被熱?	
	石皿	A-1-2	花崗岩	(9.4)	(6.05)	6.78	456		
	石皿	P3	安山岩	(7)	(6.8)	6.82	334		
	石皿	C-2-3	砂岩	(4.15)	(3.71)	2.2	28		
	石皿	A-1-4	硬砂岩	(8.7)	(8.4)	(3.72)	365	被熱 砥石か	
	石皿	E-2-3	角閃石安山岩	(5.15)	(2.3)	(4.15)	50	大部分欠損	
第82回1	石皿	C-2-3	安山岩	(6.3)	(3.7)	(6.1)	102		
	石皿	F-2-1 II層	砂岩	(2.96)	(2.54)	(1.1)	7.03	大部分欠損	
	磨石	F-2-1 II層	硬砂岩	4.7	3.7	3.63	86	被熱 砥石か	
	磨石	E-2-3	砂岩	5.3	4.61	2.78	91	砥石か	
	磨石	B-2-3	安山岩	8.7	7.4	2.95	290	被熱 砥石か	
	磨石	A-1-4	砂岩	6.75	6	4.06	272	晚期包含層 砥石 被熱	

押図番号	器種	出土地点・層位	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特記事項		
第82図	5	磨石 SK 7	3層 砂岩	(6.8)	6.5	3.84	242	砥石に転用            表面被熱、砥石との複合石器 被熱 被熱 砥石との複合石器		
	6	磨石 石	F-2-1 花崗岩	6.88	5.68	3.75	260			
	7	磨石 石	F-2-1 輝石安山岩	5.3	4.2	3.59	106			
	8	磨石 石	SK 4 安山岩	(6.7)	6.8	4.94	296			
	9	磨石 石	SK 6 2層 砂岩	(4.65)	(1.5)	(2.5)	16			
	10	磨石 石	SK 30 花崗岩	(3.8)	(3.5)	(3.72)	51			
	11	磨石 石	SK 25 輝石安山岩	(8)	(6.9)	6.24	390			
	12	磨石 石	F-2-1 II層 輝石安山岩	(5.05)	4.37	2.7	76			
	13	磨石 石	F-2-1 石英片岩	6.7	7.78	1.7	95			
	14	磨石 石	E-2-3 安山岩	(5.06)	(6.7)	3.41	144			
	15	磨石 石	E-2-3 安山岩	(15.3)	(6.1)	(11.4)	1228			
	16	磨石 石	SK 4 石英安山岩	6.5	8.95	7.77	171			
	17	磨石 石	F-2-1 II層 砂岩	(9.2)	(7.6)	(6.9)	246			
	第83図	1	敲石 石	E-2-1 II層 安山岩	11	4.45	3.1		89	試掘出土           砥石との複合石器 被熱
		2	敲石 石	D-2-3 II層 輝石安山岩	12.65	5	3.5		350	
		3	敲石 石	北側包含層 火山礫凝灰岩	12.95	4.6	3.8		335	
		4	敲石 石	E-2-3 硬砂岩	10.97	5.07	2.89		205	
5		敲石 石	D-2-1 II層 硬砂岩	10.87	6.02	4.03	310			
6		敲石 石	E-2-3 硬砂岩	12.6	4.9	3.16	200			
7		敲石 石	D-2-3 II層 硬砂岩	13.1	6.6	2.8	335			
8		敲石 石	D-2-3 紺雲母片岩	12.5	7.45	1.7	265			
9		敲石 石	D-2-3 石英片岩	14.07	3.78	2.65	160			
10		敲石 石	D-2-3 安山岩	(9.2)	(7.4)	2.13	205			
11		敲石 石	F-2-1 II層 硬砂岩	(8.9)	4.7	2.23	122			
12		敲石 石	A-2-3 砂岩	(8.7)	(4.9)	2.82	140			
第84図	1	敲石 石	D-2-3 硬砂岩	(8.85)	(7.85)	4.3	44.5	打削面に摩擦 磨石砥石に転用 へら状工具		
	2	敲石 石	E-2-3 II層 粘板岩	(4.4)	(3.3)	1.07	20			
	3	敲石 石	F-2-1 ホルンフェルス	(6.6)	(3.45)	2.81	66			
	4	凹石 石	D-2-3 緑泥片岩	11	5.8	3.56	294			
	5	凹石 石	E-2-1 安山岩	(16.2)	(15.3)	3.95	970			
	6	凹石 石	E-2-1 花崗岩	9.12	7	4.8	387			

### 凹石 (第84図4~6)

明確に窪みの部分が主体であると認定できるものを本器種に分類する。

4は緑泥片岩製。周囲を欠損しているため、原形は不明である。深さ6mmほどの小さな凹部が一つある。

5は安山岩製。表裏に大きさ深さともばらつきのある凹部を残している。これも欠損部が多く、原形は不明である。6は花崗岩製。両面にやや深めの直径3cmほどの不整形の凹部がある。両面と両側面には摩擦も認められ、磨石の類の石器である。

### (3) 石製品・土製品 (第85図4・5・86図)

#### 石製品 (第85図4・5)

4はD-2-3グリッドのI層から出土した。粘板岩製。現存長3.6cm、幅1.17cm、厚さ0.8cm、重さ3gを測る。孔は一方からの穿孔で、孔径3.5mmほどである。5は硬玉製の勾玉である。D-2-3グリッドの表土から出土した。長さ2.74cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm、重さ6.13gを測る。

孔は両方からの穿孔で、孔径は0.6cmと0.8cmである。穿孔部を中心に上部・左右側面・下部に縦横の沈線を通らしている。仕上げは極めて精緻である。

二点とも所属時期は不明である。

土製品 (第86図)

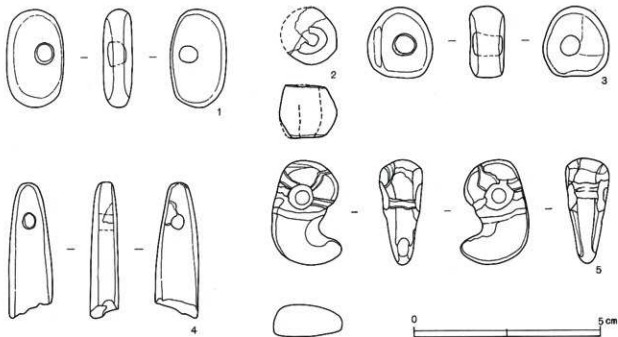
1はミズク土偶の破片である。A-2-3グリッド晩期の包含層から出土している。左肩から胸にかけての破片が残っており、中型の土偶である。肩は、前後に傘状にひろがり、乳房へと続く。乳房は、さらに1.5cmほど前方に張り出している。腕は、肩の下部から約2cm下垂している。腕の外側と乳房の上面、肩の縁辺部の前には沈線が施されている。肩の沈線はちょうど縁辺部の真横で無くなり、そこから背面までの縁辺部にはLRの縄文が付けられる。現存高は4cm、肩部の厚さが3.6cm、乳房までの厚さが5cmになる。色調は全体に黒褐色で、焼成はしっかりしている。胎土は緻密で、砂粒をほとんど含まない。形態的な特徴から縄文時代晩期中葉のものと考えられる。

2・3は焼成粘土塊である。2はA-2-1グリッド、3はA-2-3グリッドでいずれも晩期の包含層から出土している。2はほぼ円柱状をしており、成形途中のものと考えられる。色調は黒褐色で、芯まで焼けている。3は、焼成後半分分割れている。色調は暗褐色で、2同様芯まで火が通っている。

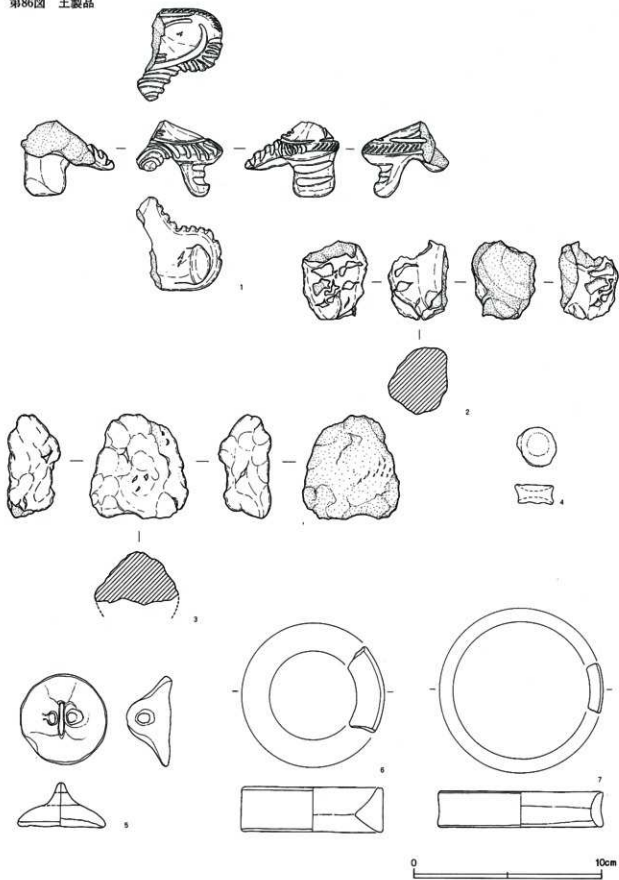
4・6・7は耳飾りである。いずれも後期中葉の包含層から出土している。4は径約2cm、中心部の厚さ3mmと小型のものである。縁のほとんどが欠けている。色調は橙褐色を呈しているが、全体に赤色塗彩された痕跡が残っている。胎土は緻密で、丁寧な成形がなされている。焼成もよい。第3号住居跡より出土。加曾利B2式期のものである。6は外径約7.6cm、内径約4.5cmで、約四分の三を欠いている。色調は灰褐色を呈している。胎土は緻密で、焼成もよい。F-2-1グリッドより出土。7は外径約8.7cm、内径約7.2cmで、約八分の七を欠いている。色調は黒褐色を呈している。胎土には細かい砂が混じる。焼成はよい。F-1-2グリッドより出土。6・7とも赤色塗彩は見られない。

5は土製の蓋である。径は、ほぼ3.5cm、ツマミまでの厚さは2.4cmで、完形品である。色調は淡い褐色を呈している。胎土には白色の砂粒が多く混じる。焼成はしっかりしている。F-2-1グリッドより出土。後期中葉頃のものであろう。

第85図 石製品



第86図 土製品



#### (4) 骨角器 (第87図 図版12・52)

第36号土坑の最下層から出土した。ニホンジカの中足骨を調整加工して製作された利器である。接するようにニホンジカの距骨も出土している。二点とも被熱の形跡は認められない。土坑の埋積状態は一括埋土と考えられ、意図的に埋められた可能性が高い。

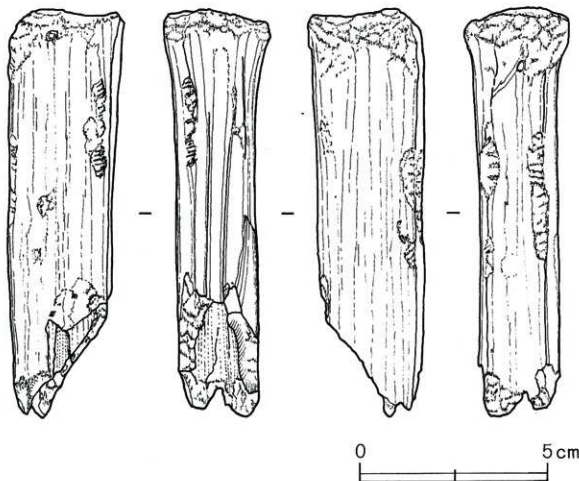
現存長10.8cm、幅2.8cm、厚さ3.1cm、重さ31.43gを計測する。スパイラルフラクチャーが認められる(P148、第9表)。刃部は折断後に研磨して、形状が整えられている。斜刃を形成し、刃角は約35°である。残存状態からの観察では、正面右側から先端部にかけて研磨痕が顕著で、スベスベとした感触がある。一部刃部を欠損しており、欠損部の割れ口は古く、使用の結果と考えられる。おそらく敲打によって分割された中足

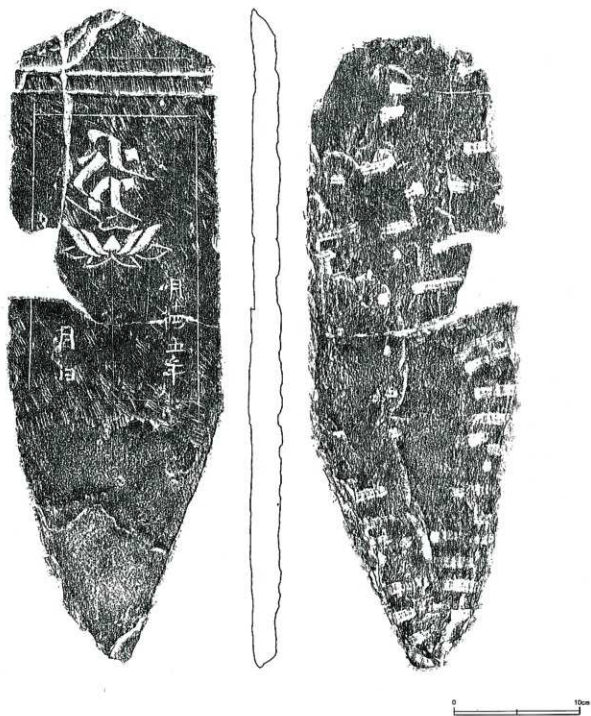
骨のなかで、割れ口の状態がある程度良好なものを選び、研磨することで鋭利な面を作出したことが考えられる。正面に骨髄面を、縦位に溝状の窪みを残している。

関節面の端部には中足骨の血管孔が貫通している。自然のものであり人為的なものではないが、骨ヒ(骨篋)のように紐を通す孔として利用されたことも考えられる。しかし、両側を縦位に半載していないことから、形態上は骨ヒには分類できないが、用途的には骨ヒと類似した加工具の可能性が想定される。

また、関節面下部の周囲には骨の角を中心に刻みが認められる。分析によれば、齧歯目の咬痕との見解が示されている(P148)。

第87図 骨角器





(5) 板碑 (第88図 図版51)

E-2-1 グリッド杭近くの擾乱地点から検出された。板碑の法量は、高さ51.4cm、上幅16.1cm、下幅16.4cm、中央部付近で厚さ2.4cmを測る。阿弥陀一尊である。種子の右下に「明徳5年(1394)年」銘があり、左下

には「月日」の文字が読めたが、その上部は欠損して判読できない。種子、蓮座の中央部には、割付線が認められ、裏面には鑿痕が明瞭に残っていた。



## V 出土試料分析結果

### 1. 石神貝塚出土赤彩土器の赤色顔料

成瀬正和

埼玉県川口市石神貝塚出土の赤彩土器20点について、用いられた赤色顔料の種類を明らかにするため、蛍光X線分析、X線回折を実施した。縄文時代に用いられた赤色顔料は朱（鉱物名；辰砂（Cinnabar）、化学名；赤色硫化水銀、化学式；HgS）とベンガラ（鉱物名；赤鉄鉱（Hematite）、化学名；酸化第二鉄、化学式；Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の二種類のうちいずれかである。

**試料** 測定は非破壊分析を原則とし、土器片そのものを測定試料として用いた。試料に用いた土器の実測図を第60図に掲げる。赤く表した部分は、本来の赤彩範囲を復元して示したものであるが、一部（2）については現状の塗彩範囲のみを示した。

**蛍光X線分析** 赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業（株）製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

**X線回折** 赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機（株）製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；30kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～160°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

**結果** 蛍光X線分析およびX線回折の結果とそれによって明らかとなった顔料の種類を第7表に掲げる。蛍光X線分析で水銀（Hg）が検出されるか、あるいは

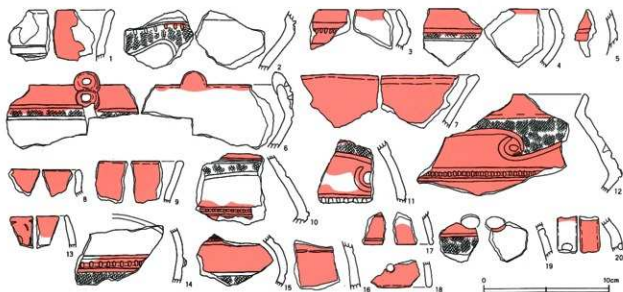
X線回折で辰砂が検出される場合、用いられている顔料は一応朱であると判断した。またX線回折で赤鉄鉱が確認されるか、あるいは蛍光X線分析で水銀（Hg）が検出されずかつ鉄（Fe）が検出される場合（もっとも土器資料では土器胎土中に含まれる鉄（Fe）が必ず検出されるか）、用いられている顔料はベンガラと判断した。しかしながら朱と判断した資料には、ベンガラが併用されている可能性がある。埼玉県寿能遺跡出土の縄文後期の赤色塗装土器あるいは赤色塗装木器の塗膜分析によって、これら赤色塗装の資料には通常複数の赤色顔料層があり、上層に朱が用いられている資料にも通常下層にベンガラが用いられていることが判明しているからである（注1）。なお15、16にはわずかながら塗塗膜が残存している。

石神遺跡の出土土器のほとんどは加曾利B2式に相当するものであるが、朱が用いられているものと、用いられていないものの割合は約半々である。大森タイプの鉢ないし浅鉢には朱が用いられるものが多い。

筆者はこれまで埼玉県内の加曾利B期では寿能遺跡（注2）、赤城遺跡（注3）、稚葉谷遺跡（注4）などで赤色顔料の調査を実施した。総合的にいえばこの時期には朱の使用される例がベンガラのみ使用される例を上回っている。また磨付系土器には朱が用いられる傾向が著しいことを指摘できる。しかしそのほかではこの時期に存在する各系統の土器と顔料の使い方の相関関係を指摘することはできず、例えば赤城遺跡ではほとんどの赤彩土器で朱が使用されるなど、むしろ遺跡ごとの事情が反映される様である。

なおこのほか細片で、図化と型式特定が困難な試料が6点あり、一応X線分析を試みたが、1点からは朱とベンガラ両者が確認され、残りの5点からは朱のみが確認されている。

第89図 赤色塗彩土器



第7表 赤色顔料分析結果

試料番号	時期	器種	出土位置	蛍光X線分析		X線回折			顔料の種類
				鉄 (Fe)	水銀 (Hg)	赤鉄鉱	辰砂	砂	
1	加曾利B2式	深鉢形土器	E-2-3 II層	+	+	-	+		朱
2	加曾利B2式	深鉢形土器	S J 3	+	+	-	-		ベンガラ
3	加曾利B1式	深鉢形土器	E-2-1 II層	+	+	-	+		朱
4	加曾利B2式	深鉢形土器	S J 3	+	-	+	-		ベンガラ
5	加曾利B2式	深鉢形土器	SK39	+	-	-	-		ベンガラ
6	加曾利B2式	深鉢形土器	S J 3	+	-	-	-		ベンガラ
7	加曾利B2式	鉢形土器	A-1-4	+	-	+	-		ベンガラ
8	加曾利B2式	鉢形土器	S J 3	+	+	-	+		朱
9	加曾利B2式	鉢形土器	E-2-3 II層	+	+	-	+		朱
10	加曾利B2式	鉢形土器	S J 3	+	+	-	-		朱
11	加曾利B2式	鉢形土器	S J 3	+	+	-	+		朱
12	加曾利B2式	鉢形土器	S J 3	+	+	-	+		朱
13	加曾利B2式	浅鉢形土器	E-2-3 II層	+	+	-	+		朱
14	加曾利B2式	浅鉢形土器	D-2-1 表土	+	+	-	+		朱
15	加曾利B式	浅鉢形土器	E-2-3 II層	+	-	+	-		ベンガラ
16	加曾利B式	台部	D-2-1 表土	+	-	-	-		ベンガラ
17	加曾利B2式	台部	E-2-3 II層	+	+	-	+		朱
18	時期不明	台部	SK39	+	-	+	-		ベンガラ
19	加曾利B2またはB3式	台部	E-2-1 II層	+	+	-	+		朱
20	加曾利B式	釣手土器	E-2-3 II層	+	-	-	-		ベンガラ

\* +は確認できたもの、-は確認できなかったものを表わす

(注1) 成瀬正和・岡田文男 (1995) 埼玉県寿能遺跡出土縄文漆器の研究(3)―漆塗土器― 日本文化財科学会第12回大会

(注2) 成瀬正和 (1984) 赤色塗彩土器・漆塗土器・漆液容器 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 (人工遺物編) 埼玉県立博物館

(注3) 成瀬正和 (1988) 赤城遺跡の赤彩土器に使用された赤色顔料 『赤城遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(注4) 成瀬正和 (1990) 雅楽谷遺跡の赤彩土器 『蓮田市雅楽谷遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 2. 川口市石神貝塚より出土した動物遺存体について

パリオ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

川口市石神貝塚では、1995年東貝塚(金子・田部井、1977)に隣接する地点で道路の拡幅に伴い発掘調査が行われ、縄文時代後期(加曾利B式期)の住居跡や土坑談期を主体とする遺物などが検出された。とくに、獣骨・魚骨・貝などの動物遺存体は豊富で、ヤマトシジミの貝殻がまつたいわゆる「貝土坑」もみられた。

今回、談期の動物質食料などに関する情報を得るために、貝土坑2基からまとまって得られたヤマトシジミの計測と、骨類を中心とした動物遺存体の同定を行った。動物遺存体の同定・解析は、いわき短期大学山崎京美先生にお願いした。先生には限られた時間の中で作業を実施していただいたにもかかわらず、事前協議から本論文のとりまとめまで終始おしめないご協力を頂いた。その成果は3. に署名原稿として掲げたが、そのご協力に対してここで感謝の意を表します。

### 2. 貝土坑より出土したヤマトシジミのサイズ

#### (1) 試料

試料は、SK-37より出土した1880点とSK-45より出土した3147点の計5027点のヤマトシジミの殻である。各土坑とも、数個のビニール袋に一括して収納されていた。そのうち、破損などによって殻長の計測ができないと思われた計878点を対象から除き、最終的に計4149点の計測を行った。

計測に先立ち、当社にて殻の左右の分類を行った。計測は上記の4149点について、殻長のみについて長さを測った。計測値は、左右別に1mm単位の階級値(サイズ)毎に整理・計数し、表と図に示すことにした。なお、試料が収納されていたビニール袋中には、ヤマトシジミ以外の貝殻片が両土坑とも含まれていた。それぞれ数点ずつであったが、小片であり同定根拠となる形質もよく違っていなかったため、同定・計測は実

施しなかった。

#### (2) 計測結果

##### 1) 左右の殻数

SK-37・SK-45ともに、ヤマトシジミの左右の殻数の合計は一致する(第8表)。また、各サイズ毎にみても左右の殻数はほぼ一致している。埋積時から取上後までの破損などを考慮すれば、左右の殻数は非常に良く対応していると言ってよい。

##### 2) 殻長の変異

両土坑から出土したヤマトシジミの殻長は、11.1mm~31.0mmの間に収まり、その変異幅は約20.0mmと小さい。また、両土坑とも左右の別なく殻長約20.0mm付近を中心にした正規分布を呈し(第90図)、大多数は15.1mm~27.0mmの範囲に含まれる。したがって、殻長からみる限り両土坑のヤマトシジミは20.0mmを基準にし、前後5.0~7.0mm程の変異の幅で選択されたと考えられる。

#### (3) まとめ

以上より、縄文時代後期と考えられる貝土坑SK-37・SK-45より出土したヤマトシジミには、共通した特徴が認められた。これらは、左右の殻数がほぼ一致し、殻長約20.0mmを中心に狭い変異幅で正規分布することから、約20.0mmを目安として選択的に採集されたヤマトシジミが食用などに供された後、各土坑に一括して投棄された可能性がある。両土坑の時期について詳細な検討を経ていないので、時間差があってもこのような行為が共通して行われていたのか、ほぼ同時に行われていたのかについては、今のところよくわからない。

なお、今回計測を行った試料は、全て直接火を受けた(いわゆる「焼けた」)状態ではなかった。しかし、

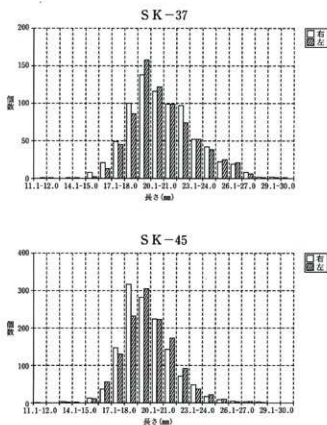
これらに混って出土した骨類は、SK-37では焼けていなかったのに対して、SK-45ではほとんど焼けた痕跡が認められた(3.参照)。このような差が、どのような

状況の差を示すものか現段階では推定できないが、今後検討を要する事実として指摘しておきたい。

第8表 ヤマトシジミ計測結果

道標 長さ(mm)	SK-37		SK-45	
	右	左	右	左
11.1-12.0	—	1	1	—
12.1-13.0	1	—	—	—
13.1-14.0	—	1	3	2
14.1-15.0	1	—	2	—
15.1-16.0	8	2	13	11
16.1-17.0	21	13	37	56
17.1-18.0	49	45	147	130
18.1-19.0	100	86	317	232
19.1-20.0	138	158	282	305
20.1-21.0	116	122	224	223
21.1-22.0	99	99	143	173
22.1-23.0	97	74	71	92
23.1-24.0	52	52	48	37
24.1-25.0	42	38	17	22
25.1-26.0	22	25	9	10
26.1-27.0	19	21	5	3
27.1-28.0	8	6	3	4
28.1-29.0	2	1	3	1
29.1-30.0	2	1	—	—
30.1-31.0	1	—	—	—
破片	166	191	273	248
合計	944	936	1598	1549

第90図 SK-37・SK-45ヤマトシジミの殻長



### 3. 石神貝塚出土の動物遺存体

山崎京美

#### (1) 試料

石神貝塚は1995年に発掘調査が行われたが、狭い範囲にもかかわらず黒色土の中から多量の動物遺存体が検出された。遺存体の採集方法は、発見した時点で土壌ごと取り上げ、その後、水先選別して採取する方法がとられた。これら遺存体の保存状態は良好であるが、焼けていない遺存体と焼けた遺存体が混在している。通常は保存状態の良くない焼骨も本遺跡では劣化が進行しておらず、同定形質を保持しているものが多かった。ただし、焼骨の大きさは大半が2cm前後の細片となっており、また現生標本に比べて著しく収縮、変形しており、種名や部位が判別できないものもあった。本遺跡の遺存体総数は1682点で、それらのうち同定できた試料数は582点(同定率34.6%)であった。以下に、動物遺存体の同定結果について報告する。

なお、比較した現生骨格標本は国立科学博物館所蔵標本と筆者所有標本を使用した。また、人骨については国立科学博物館人類研究部の松村博文博士に同定していただいた。

#### (2) 同定結果

##### 1) 同定された動物遺存体の種名

石神貝塚から出土した動物遺存体のうち、種名などが判明したのは以下のとおりである。貝類では3種、魚類では9種、哺乳類では4種が同定された。

##### I) 軟体動物門 Phylum Mollusca

###### 腹足綱 Class Gastropoda

- 1 目・科不明 Order et fam. indet.

###### 二枚貝綱 Class Bivalvia

- 2 ハマグリ *Meretrix lusoria*  
3 ヤマトシジミ *Corbicula japonica*  
4 目・科不明 Order et fam. indet.

##### II) 脊椎動物門 Phylum Vertebrata

###### 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

- 5 メジロザメ科属・種不明  
*Carcharhinidae* gen. et sp. indet.  
6 アオザメ *Isrus oxyrinchus*  
7 目・科不明 Order et fam. indet.

###### 硬骨魚綱 Class Osteichthyes

- 8 ウナギ? *Anguilla japonica*  
9 コイ科属・種不明  
*Cyprinidae* gen. et sp. indet.  
10 ボラ科属・種不明  
*Mugilidae* gen. et sp. indet.  
11 スズキ属 *Lateolabrax* sp.  
12 クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.  
13 タイ科属・種不明  
*Sparidae* gen. et sp. indet.  
14 マサバ? *Scomber japonicus*
- ###### 哺乳綱 Class Mammalia
- 15 キツネ *Vulpes vulpes*  
16 イノシシ *Sus scrofa*  
17 シカ *Cervus nippon*  
18 ヒト *Homo sapiens*

#### 2) 記載 (図版52)

##### ・貝類

貝類は巻貝と二枚貝の破片が検出されている。巻貝はS J 3のP 2・3から1点のみ出土している。大形の巻貝の芯部分が残存しているが、表面の石灰分が溶けており原形が判別できない(写真1)。また、二枚貝はD-2-1とE-2-3及びS J 3から検出された。いずれも殻頂の保存されていない小破片であるが、これらのうちS J 3のII層出土試料はヤマトシジミと考えられる。成長輪脈を持つ腹縁の一部が検出された(写

真3)。またE-2-3のNo274の2点は、やや厚質で殻表、腹縁とも平滑なことやサイズから判断してハマグリであると思われる(写真2)。貝類は断片的試料であるが、いずれも被熱の痕跡が認められない。これは、2. で殻長の計測を行った貝土坑 SK-37・45からまともに出土したヤマトシジミと同様である。

#### ・魚類

##### アオザメ

SJ3から表面が平滑で、鋸歯縁を持たないサメの歯冠が1点検出された(写真4)。これは現生標本と比較した結果、アオザメの右側の下顎歯であり、しかも機能歯ではなく歯胚と同定された。エナメル部分は若干変色しているようであるが、焼けているかどうかは判断できなかった。

##### メジロザメ科

SJ3の人骨付近より、鋸歯縁を持ったサメの歯冠破片1点検出された(写真5)。鋸歯の状態から、メジロザメ科の左側上顎歯と同定された。エナメル部分がやや赤みがかった色に変色しており、焼けた痕跡を残している。

##### 軟骨魚類

直径1~2mmの円筒形をした椎体が、SJ3のみから出土した。人骨付近で6点、II層で41点、II層下部で3点、4層で4点の合計54点である。これらは軟骨魚類の椎体の特徴を有しているが、これらがサメ類のものかエイ類のものかは区別がつかなかった。いずれも被熱痕がある。

##### ウナギ?

SJ3のII層よりウナギと思われる腹椎が1点のみ検出されている。被熱痕がある。

##### コイ科

SJ3のII層より、焼けた咽頭骨が1点検出されている(写真6)。小形であるが、コイに近似する特徴を持っている。しかし、遺存体は咽頭歯を欠損しており、属以下の同定は困難と判断した。

##### ボラ科

椎体径約14mmの大形の椎体がSX1より2点、また

椎体の破片がSJ3のII層より3点検出されている。椎体は側面に粗い網状模様を有しており(写真9)、これらはボラ科に属すると同定された。大形椎体のうち1点は腹椎と部位が特定できたが(No179)、他の1点は部位不明である(No164)。いずれも被熱痕はあるが、骨全体が黄色に変色している点で、他の遺存体とは異なっている。

##### スズキ属

SJ3のII層より前上顎骨の破片1点(写真7)、No1343よりスズキ属と思われる椎体1点検出された。前上顎骨のみ焼けて灰白色になっていた。

##### クロダイ属

SJ3のP2・3より本属に特徴的な、細かい溝をもつ鰓蓋第2棘が1点、同じくII層よりクロダイ属に似る椎体1点が出土している。前者のみ焼けている。

##### タイ科

SJ3の人骨付近からは顎骨片2点、歯45点、同II層より顎骨片5点、歯356点、鰓棘1点、同P2・3より歯1点、SX1より前頭骨片3点、E-2-3より鰓棘1点検出された。タイ科は各所から断片的に検出されているが、最も多くの遺存体が出土したのはSJ3のII層である。ここで、現生クロダイを例に歯数を数えてみると、前上顎骨では約53個、歯骨では約42個であった。すなわち、クロダイ1個体には上下左右の歯を合計して約190個の歯があることになる。II層では歯が多く検出されているが、このことを以てタイ科が集中して出土したとは言えない。本遺跡ではタイ科は焼けて5mm以下の細片となっていることが多いことから、タイ科の個体数を推定することは困難である。なお、焼けていない骨は前頭骨及び鰓棘の一部(E-2-3)のみである。

##### マサバ?

SX1より焼けて変形した椎体1点が出土している(写真8)。現生標本との比較ではマサバに酷似していたが、試料は変形していることから断定には至っていない。

## ・哺乳類

### キツネ

E-2-3よりキツネと同定される下顎犬歯の右側が1点検出された。本試料は焼けていない。

### イノシシ

D-2-1より肩甲骨の左1点及び左右不明1点、左上腕骨近位(写真17)及び遠位各1点、左第5中手骨(若獣)1点が、S J 3より大白歯1点、左尺骨1点、右中心足根骨?1点、指骨?1点、イノシシと思われる右第4足根骨1点(写真20)、末節骨1点、同II層より左脛骨1点、左踵骨?1点、末節骨1点、II層下部よりイノシシと思われる指骨1点、4層より第2あるいは5指中節骨?1点、同P 2・3より右上顎第1切歯1点(写真16)、E-2-3より大白歯1点、右第3手根骨1点、左踵骨1点(写真18)、左第2中足骨1点(写真19)、末節骨1点(写真22)、種子骨1点(写真21)、F-2-1から右下顎第3大白歯(萌出直後)1点、S X 1より種子骨1点、イノシシと思われる大腿骨骨端(若獣)1点、P79から基節骨1点、右第4中手骨1点、S K 45よりイノシシと思われる中節骨1点が検出された。合計で29点である。

イノシシは他のニホンジカと並んで多くの遺存体が出土しているが、同定された部位の中では手足骨が多い。また、骨端の遊離した若獣も含まれていた。焼けていないものは、下顎第3大白歯、基節骨、上顎第1切歯、大白歯、第4中手骨、末節骨、踵骨である。

### ニホンジカ

E-2-3より右下顎第2切歯1点(写真23)、右肩甲骨1点(写真26)、中手骨1点、中足骨1点、末節骨1点、ニホンジカと思われる右大腿骨1点(若獣)、S K 32より歯の細片16点、S K 36-P79-No1より右距骨1点(写真27)、同No2より右中足骨1点(写真29)、S J 3より左下顎第2大白歯1点、大白歯?破片8点、中手骨(接合試料)1点(写真24)、中足骨1点(接合試料)(写真28)、中節骨1点、同II層より右手根骨1点、中手骨1点、同P 2・3より上顎骨?が1点、右中足骨1点、S X 1より右橈骨1点(写真25)、左脛骨

1点、中手骨1点(No15と接合)、中足骨2点、ニホンジカと思われる右踵骨1点が出土している。

焼骨が大半であるが、焼けていないものの上顎第2切歯、距骨、肩甲骨、中足骨、末節骨、大腿骨がある。特に中足骨にはスパイラル・フラクチャーと、齧歯目の咬痕が認められた。

### イノシシあるいはニホンジカ

D-2-1より肋骨2点、椎体片(若獣)9点、D-2-3より肋骨1点、E-2-3より上腕骨あるいは大腿骨1点、S J 3より距骨1点、左脛骨(若獣)1点、同I層より橈骨1点(接合試料)、II層より椎体骨端(若獣)、P8より脊椎骨1点、S X 1より右頸椎前関節突起1点、S K 32より肩甲骨4点(同一破片?)が出土している。いずれもイノシシやニホンジカに帰属すると考えられるが、各遺存体には同定のキーとなる形質が保存されていないことから、イノシシあるいはニホンジカとした。

### ヒト

S J 3より頭蓋冠の破片が1点(写真32)とS K 29より腸骨の破片が1点出土している。両試料とも焼けているが、頭蓋冠では外面に亀裂が入っていた。

### その他

骨片の中には多くの同定できていない骨がある。骨の特徴や質感から、魚類や哺乳類の区別がつくものは大分類でまとめた。点数を見ると、魚類では左角舌骨1点、歯1点、椎体6点、鱗棘1点、右方骨1点、破片23点、小形哺乳類では指骨1点(イタチに似る)、大腿骨1点(テンと同サイズ)、哺乳類では脊椎骨破片5点、肋骨片7点、関節片12点、骨幹片40点、骨片923点があった。

## 3) 遺存体の特徴について

### ・出土状況と分布

ここでは、動物遺存体のグリッドや遺構での出土状況を見てみる(第9表)。グリッドではD-2-1から317点(非焼骨4点)、D-2-3から5点、E-2-3からは213点(非焼骨14点)、F-2-1から1点(非焼骨)

とE-2-3グリッドからの出土数が多い。また、遺構ではS J 3のI層から23点、II層から370点(非焼骨3点)、II層下部から56点、4層下部から15点、人骨付近から55点、P 2・3から60点(非焼骨30点)、その他からは(地点記録あり)125点(非焼骨2点)の合計704点、SK29から2点、SK32から22点、SK36(P79を含む)から4点(全て非焼骨)、SK37から30点(非焼骨8点)、SK45から21点、SX1から373点(非焼骨4点?)とS J 3が最も多く、またSX1でも集中が見られる。

このように、動物遺存体はグリッドではD-2-1からF-2-1に広く分布するが、その中心はS J 3を含むE-2-1、またSX1を含むE-2-3グリッドであることがわかる。つまり、遺存体の分布は加曽利B2式期のS J 3覆土や、SX1焼土遺構及び獣骨集中地点などの遺構に伴って集中して発見されている。なお、発掘調査時の所見では、ピットなどの遺構に意識的に埋めたかと想定されるような出土状況を示したという。遺存体の平面分布を見ても、S J 3では覆土以外にP 2・3とP 8において発見されているが、特にP 2・3では各種遺存体が多く検出され、その内容は焼骨と非焼骨が半数ずつであった。一方、S J 3覆土で出土位置が記録されている遺存体の分布をみると(第91図)、炉を境にして北側よりも南西側に集中して検出されている。しかも、種名の判明した遺存体が多い。一方、炉の北側ではP 2・3上層付近で多く発見されている。なお、ここでは非焼骨はピット出土の遺存体に比べて極めて少ない。他に、SK29、SK32、SK36(P79)、SK37、SK45からも遺存体が検出されているが、SK36(P79)では非焼骨のみが、SK37では骨片に焼骨が含まれるもの非焼骨が多く発見されるなど、遺構ごとに遺存体の状況が異なっている。

このように、遺存体の出土状況や分布を見ると、調査時所見である遺構に埋めたような捨てられ方をしていたことが裏付けられ、また遺構によって遺存体が焼けているか、焼けていないかの違いのあることが明らかとなった。

次に種ごとに分布を見ると、D-2-1では二枚貝、イノシシ、イノシシあるいはニホンジカ、D-2-3ではイノシシあるいはニホンジカ、E-2-3ではハマグリ、タイ科、キツネ、イノシシ、ニホンジカ、イノシシあるいはニホンジカ、F-2-1ではイノシシが検出された。また、S J 3ではヤマトシジミ、メジロザメ科、アオザメ、軟骨魚類、コイ科、ウナギ?、ボラ科、スズキ属、クロダイ属?、タイ科、小形哺乳類、イノシシ、ニホンジカ、イノシシあるいはニホンジカ、ヒトが、同P 2・3では巻貝、クロダイ属、タイ科、イノシシ、ニホンジカが、P 8ではイノシシあるいはニホンジカが、SK29からはヒトが、SK32からはニホンジカとイノシシあるいはニホンジカが、SK36(P79)からイノシシとニホンジカが、SK37からは魚類、小形哺乳類を含む哺乳類が、SK45からは魚類とイノシシが、SX1からはボラ科、マサバ?、タイ科、イノシシ、ニホンジカ、イノシシあるいはニホンジカが出土している。グリッドでは、E-2-3が検出量・種類とも豊富であった。また、遺構ではSX1の出土量が最も多かったが、その割に同定できた試料は多くはなく、S J 3の検出種数の方が多かった。SX1は焼土遺構と獣骨集中地点で構成されており、そのため保存状態は良好で焼土が付着した試料も多かったが、同定可能な試料は限られていた。

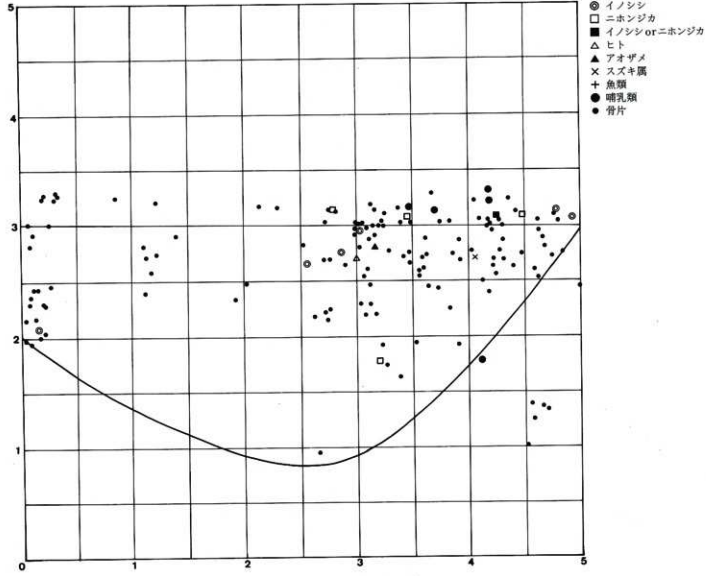
以上のように、種別の分布状況を見ると貝類、魚類、哺乳類、ヒトと多様な種類が出土量の多いグリッドや遺構から多く検出されている。これらの中で、SK29からヒトの腸骨片とヒト以外の哺乳類骨片が出土していることは注目される。焼人骨(頭蓋冠片)はS J 3からも検出されているが、両試料とも他の焼骨と同様に亀裂が入り、軽量になるほど焼けている。

#### ・遺存体の内容と残存部位

今回の分析で同定できた動物は、巻貝、二枚貝、メジロザメ類、アオザメ、軟骨魚類、ウナギ?、コイ科、ボラ科、マサバ、クロダイ属、タイ科、スズキ属、キツネ、イノシシ、ニホンジカであった。本遺跡は1976



第91図 第3号産層動物遺存体の分布



年に調査した東貝塚に隣接することから、今回の結果と東貝塚の同定結果を比較してみる。東貝塚では、土坑からヤマトシジミ、コイ、クロダイ、スズキ、コチ、タヌキ、イヌ、オオカミ、イノシシ、ニホンジカ、バンドウイルカが発見された。また、貝塚部分では、マツカサガイ、イシガイ、ヤマトシジミ、ハマグリ、オキシジミ、アオザメ科、ミズワニ、マダラトビエイ、コイ、ボラ、クロダイ、スズキ、コショウダイ、コチ、ヘビ、キツネ、タヌキ、カワウソ、ノウサギ、イノシシ、ニホンジカが検出されたが、焼けた骨の報告はない(金子・田部井 1977)。ちなみに、この貝塚の形成は加曾利B 2式期から開始され、主体は安行3 a式期と考えられている。今回の試料も加曾利B 2式期に所属すると考えられており、遺存体の内容も1976年の調査結果とほぼ同様の動物相を示している。なお、今回新たに発見された種は、メシロザメ科、ウナギ?、マサバである。

ところで、今回の遺存体には焼骨と非焼骨が混在していたが、これは1976年の結果にはなかったことである。焼骨は亀裂が入り、細片となって検出されるが、非焼骨は貝塚で普通に検出されるような、スパイラル・フラクチャーや露出した遺存体を齧歯目が喰い荒らした時に付いた咬痕も認められた(写真29)。たとえば、折り取ったり骨髄食に伴って付いたスパイラル・フラクチャー(丹羽 1983)には、SK36とSJ3-P2・3のニホンジカの中足骨や、E-2-3 (Na1025)のイノシシあるいはニホンジカの上腕骨が大腿骨があり、また咬痕にはE-2-3 (Na1021)のニホンジカ肩甲骨や上記のE-2-3 (Na1025) 試料、SK36試料があった。これら非焼骨はグリッドからの検出数は多くはなく、前述のようにSJ3-P2・3、SK36、SK37の遺構で多く発見された。また、SX1の南方で検出された獣骨集中地点では非焼骨がほとんどであった(Na1021、1024、1025、1026、1028、1336、1337)。一方、焼骨には古い割れ口を持つ破片同士が接合した例があるが(SJ3のI層、Na611・953、SX1 Na18・22) (写真28)、これは焼けて亀裂が入った骨が埋没の

過程で割れたものと推定される。焼骨は縮小、変形しており、細かく輪切りになったような破片(写真30)や、打痕のあるもの(SX1-Na100・141) (写真31)、古い割れ口同士が接合するものなどの事例が認められた。

### (3) まとめ

以上のように、本遺跡では非焼骨と焼骨が混在しながらも出土状況に違いのあることが指摘できた。

ところで、灰白色を呈し亀裂・収縮・変形が認められる焼骨については、800~1000℃以上の温度で1時間20分以上焼かれたとする実験結果がある(Driesch, A.vonden 1976)。さらに骨に細かい亀裂が入っている場合は、乾燥した骨が焼かれたものではなく、軟部の付着した状態のものであるという報告もある(馬場・茂原他 1986)。これら実験結果から本遺跡の焼骨を考えてみるならば、SX1焼土遺構は多量の焼骨を共存することから、焼いた場所はSX1で骨は肉などが付着した状態で焼かれたと推測される。焼骨の様相は、SX1出土試料も他の出土試料も同じである。このSX1と他のグリッドや遺構から出土した焼骨が同一起源を持つかどうか、またSX1南方の獣骨集中地点とビットなどから検出された非焼骨とはどのような関連があるのか(たとえば最初に焼かない骨をビットや土坑に埋めたり、SX1南方で遺棄した後に骨を焼いて住居跡覆土や包含層に撒いたのか)、あるいは焼骨と非焼骨は無関係なのか、さらに焼人骨と他の焼骨の関係等、遺存体のみの分析からでは判断が難しい。しかし、本遺跡では多量の遺物が包含層の、特にE-2-1・E-2-3に集中している状況であること、SX1で検出された遺存体には部位の同定できた骨は少なく、遺構やグリッドから多くの種と部位が検出されていることを考慮すると、焼骨と非焼骨は他の遺物と相互に関連し、その一連の行為の中で非焼骨と焼骨も解釈できるのではなからうか。本遺跡のような焼骨は、近隣では桶川市の後谷遺跡から報告されているが、ほとんどがイノシシやシカであることや部位には手や足の骨

が多いなどの偏りが指摘されている(金子 1979)。本遺跡では他種類の動物が含まれている点、イノシシやシカでは手足骨が目立つものの体の各部分が検出されている点で後谷遺跡とは異なっている。今回は道路幅の狭い範囲の調査だけに、遺跡の性格を考えることに限界はあるが、焼骨の意味を考える上で興味深い出土状況を示している。

#### 謝辞

比較した現生骨格標本の利用にあたって便宜を図って下さった国立科学博物館の真鍋真博士、また人骨についてご多忙の中を同定して下さった松村博文博士に記して厚くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 馬場悠男・茂原信生他 1986 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨 霊山根古屋遺跡の研究 福島県霊山町教育委員会
- Driesch, A. von den, 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites, P eabody Museum Bulletin. P eabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University
- 金子浩昌 1979 後谷遺跡出土の獣骨 後谷遺跡-荒川左岸北部流域下水道元荒川幹線工事に伴う調査-後谷遺跡発掘調査会
- 金子浩昌・田部井功 1977 川口市石神貝塚 1976年度東側貝塚発掘調査概報 川口市教育委員会
- 丹羽百合子 1983 解体・分配・調理 縄文文化の研究2 生業 雄山閣

第9表 石神貝塚出土の動物遺存体一覧

出土地点	遺物番号	層位	種名	部位名	左右	点数	被熱痕	備考
D-2-1	110		哺乳類	骨幹		2	有	
D-2-1	117		哺乳類	破片		2	有	うち1点骨幹
D-2-1	126		哺乳類	破片		1	有	
D-2-1	139		不明	関節?		1	有	
D-2-1	139		哺乳類	破片		5	有	
D-2-1	145		イノシシ	第5中手骨	左	1	有	遠位骨端、若
D-2-1	147		哺乳類	破片		6	有	
D-2-1	148		哺乳類	破片		1	有	
D-2-1	149		哺乳類	破片		1	有	
D-2-1	152		イノシシ	肩甲骨		1	有	棘部
D-2-1	247		哺乳類	破片		1	有	
D-2-1	257		哺乳類	破片		138	有	細片
D-2-1	266		哺乳類	肋骨		4	有	小形、中形
D-2-1	266		イノシシ	上腕骨	左	1	有	近位
D-2-1	266		哺乳類	破片		89	有	細片
D-2-1	266		イノシシ	肩甲骨	左	1	有	棘部
D-2-1	271		哺乳類	脊椎骨骨端		1	有	若
D-2-1	271		哺乳類	肋骨		2	有	
D-2-1	271		哺乳類	破片		8	有	
D-2-1	273		哺乳類	破片		35	有	細片
D-2-1	273		イノシシ or ニホンジカ	肋骨		2	無	
D-2-1	273		イノシシ or ニホンジカ?	脊椎骨		9	有	骨端遊離
D-2-1	288		二枚貝	破片		1	無	
D-2-1	288		イノシシ	上腕骨	左	1	有	遠位
D-2-1	304		哺乳類	破片		3	有	
D-2-3			哺乳類	破片		4	有	
D-2-3	300		イノシシ or ニホンジカ	肋骨		1	有	
E-2-3	253		哺乳類	破片		4	有	
E-2-3	261		ニホンジカ	中足骨		1	有	骨幹
E-2-3	264		哺乳類	関節片		1	有	
E-2-3	264		イノシシ	第3手根骨	右	1	有	
E-2-3	268		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	274		ハマグリ?	殻		1	無	
E-2-3	274		ハマグリ?	殻		1	無	
E-2-3	284		哺乳類	破片		5	有	
E-2-3	335		二枚貝	殻		1	無	
E-2-3	579		哺乳類	破片		6	有	
E-2-3	829		哺乳類	破片		5	有	
E-2-3	870		イノシシ	第2中足骨	左	1	有	近位
E-2-3	870		哺乳類	破片		4	有	
E-2-3	908		哺乳類	破片		2	有	
E-2-3	911		ニホンジカ	中手骨		1	有	骨幹
E-2-3	911		哺乳類	破片		16	有	
E-2-3	914		哺乳類	破片		8	有	
E-2-3	932		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	954		哺乳類	破片		11	有	
E-2-3	960		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	1021		ニホンジカ	肩甲骨	右	1	有	近位、齧歯目の咬痕
E-2-3	1024		ニホンジカ?	大腸骨	右	1	無	遠位骨端、若
E-2-3	1024		哺乳類	破片		1	無	
E-2-3	1025		イノシシ or ニホンジカ	上腕骨 or 大腸骨		1	無	骨幹、齧歯目咬痕、スパイラル・フラクチャー
E-2-3	1026		哺乳類	破片		4	無	焼骨1
E-2-3	1028		イノシシ	踵骨	左	1	有	
E-2-3	1028		哺乳類	破片		6	有	
E-2-3	1028		ニホンジカ	末節骨		1	有	
E-2-3	1096		哺乳類?	破片		5	有	
E-2-3	1097		不明	不明		1	有	黒化
E-2-3	1098		哺乳類	破片		3	有	
E-2-3	1099		哺乳類	破片		4	有	
E-2-3	1102		イノシシ	種子骨		1	有	
E-2-3	1102		哺乳類	破片		8	有	
E-2-3	1107		不明	破片		5	有	微細片
E-2-3	1110		哺乳類	破片		8	有	
E-2-3	1123		哺乳類	破片		4	有	

出土地点	遺物番号	層位	種名	部位名	左右	点数	被熱痕	備考
E-2-3	1131		不明	破片		4	有	
E-2-3	1137		哺乳類?	破片		9	有	
E-2-3	1138		哺乳類	破片		11	有	
E-2-3	1153		哺乳類	破片		6	有	
E-2-3	1156		哺乳類	破片		6	有	
E-2-3	1166		哺乳類	破片		13	有	
E-2-3	1176		哺乳類	破片		23	有	
E-2-3	1191		哺乳類	破片		3	有	
E-2-3	1192		キツネ	下顎大歯	右	1	有	無
E-2-3	1193		イノシシ	末節骨		1	無	無
E-2-3	1193		魚類	破片		1	無	無
E-2-3	1336		タイ科	鱈鱚		1	無	無
E-2-3	1337		ニホンジカ	下顎第2切歯	右	1	無	無
E-2-3	1373		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	1507		イノシシ	大白歯		1	有	無
E-2-3	1507		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	1531		哺乳類	破片		1	有	
E-2-3	1538		哺乳類	脊椎骨		1	有	骨端(若)
E-2-3	1538		哺乳類	脊椎骨骨端		1	有	若
F-2-1			イノシシ	下顎第3大白歯	右	1	無	無
P79			イノシシ	基節骨		1	無	無
P79			イノシシ	第4中手骨	右	1	無	無
S J 3		P 2・3	巻貝	殻芯		1	無	無
S J 3		P 2・3	クロダイ属	臀鰭第2棘		1	無	無
S J 3		P 2・3	哺乳類	破片		13	無	無
S J 3		P 8	イノシシ or ニホンジカ	脊椎骨		1	有	神経線
S J 3		I 層	哺乳類	骨幹		1	有	
S J 3		I 層	イノシシ or ニホンジカ	椎骨		1	有	骨幹(接合、古い割れ口)
S J 3		I 層	哺乳類	骨幹		6	有	
S J 3		I 層	哺乳類	破片		15	有	
S J 3		4層	軟骨魚類	椎体		4	有	
S J 3		4層	イノシシ	中節骨?		1	有	第2 or 5指、遠位端
S J 3		4層	タイ科	歯		10	有	
S J 3		II層	魚類	鱈鱚		1	有	
S J 3		II層	不明	不明		1	有	
S J 3		II層	ニホンジカ	手根骨	右	1	有	
S J 3		II層	スズキ属	前上顎骨		1	有	
S J 3		II層	魚類	椎体		7	有	
S J 3		II層	タイ科	歯		300	有	
S J 3		II層	イノシシ	末節骨		1	有	
S J 3		II層	タイ科	鱈鱚		1	有	
S J 3		II層	魚類	歯		1	有	
S J 3		II層	ニホンジカ	中手骨		1	有	
S J 3		II層	イノシシ	踵骨?	左	1	有	
S J 3		II層	軟骨魚類	椎体		41	有	
S J 3		II層	魚類	不明		1	有	
S J 3		II層	コイ科	咽頭骨		1	有	
S J 3		II層	イノシシ or ニホンジカ	脊椎骨骨端		1	無?	若
S J 3		II層	ボラ科	椎体		2	有	
S J 3		II層	ウナギ?	腹椎		1	有	
S J 3		II層	小形哺乳類	指骨		1	有	イタチ?
S J 3		II層	ヤマトシジミ?	殻		1	有	
S J 3		II層	イノシシ	脛骨	左	1	有	遠位
S J 3		II層	哺乳類	脊椎骨		1	有	
S J 3		II層	タイ科	顎骨		3	有	
S J 3		II層下部	イノシシ?	指骨		1	有	遠位端
S J 3		II層下部	軟骨魚類	椎体		3	有	
S J 3		II層下部	タイ科	歯		45	有	
S J 3		II層下部	クロダイ属?	椎体		1	有	
S J 3		II層下部	タイ科	顎骨		2	有	
S J 3		II層下部	魚類	椎体		2	有	
S J 3		II層下部	ボラ科	椎体		1	有	
S J 3		II層下部	タイ科	歯		1	有	
S J 3		II層下部	タイ科	歯		2	有	
S J 3		II層下部	タイ科	顎骨		1	有	
S J 3		II層下部	哺乳類	脊椎骨		1	有	骨端なし
S J 3		II層下部	タイ科	歯		45	有	

出土地点	遺物番号	層位	種名	部位名	左右	点数	被熱痕	備考
S J 3		人骨付近	軟骨魚類	椎体		6	有	
S J 3		人骨付近	メシロザメ科	上顎歯	左	1	有	
S J 3	1	P 2・3	哺乳類	破片		3	有	うち1点骨幹
S J 3	3	P 2・3	ニホンジカ	上顎歯?		1	有	
S J 3	4	P 2・3	不明	破片		7	有	微細片
S J 3	6	P 2・3	タイ科	歯		1	有	
S J 3	6	P 2・3	哺乳類	破片		9	無	
S J 3	7	P 2・3	不明	破片		1	有	微細片
S J 3	8	P 2・3	ニホンジカ	中足骨	右	1	無	近位、スパイラルフラクチャー
S J 3	8	P 2・3	哺乳類	破片		1	無	
S J 3	10	P 2・3	イノシシ	上顎第1切歯	右	1	無	
S J 3	11	P 2・3	不明	破片		*	有	微細片
S J 3	12	P 2・3	不明	破片		5	有	微細片
S J 3	13	P 2・3	哺乳類	破片		3	有	1518整?
S J 3	15	P 2・3	不明	破片		1	無	
S J 3	16	P 2・3	哺乳類	不明		1	無	
S J 3	17	P 2・3	哺乳類	破片		10	有	
S J 3	362		哺乳類	骨幹		1	有	
S J 3	497		ヒト	頭蓋冠破片		1	有	
S J 3	576		ニホンジカ	中節骨		1	有	遠位端
S J 3	586		哺乳類	破片		1	有	
S J 3	586		イノシシ	尺骨	左	1	有	関節
S J 3	611		ニホンジカ	中手骨		1	有	骨幹、接合する
S J 3	820		哺乳類	破片		4	有	
S J 3	820		イノシシ	大白歯		1	有	
S J 3	858		イノシシ?	末節骨		1	有	
S J 3	858		哺乳類	破片		8	有	
S J 3	858		イノシシ or ニホンジカ	距骨		1	有	
S J 3	871		哺乳類	破片		13	有	
S J 3	871		イノシシ	指骨?		1	有	中節骨?、近位骨端
S J 3	953		ニホンジカ	中足骨		1	有	接合
S J 3	970		哺乳類	破片		4	有	
S J 3	970		イノシシ	中心足根骨	右?	1	有	
S J 3	1132		哺乳類	骨幹		1	有	
S J 3	1136		哺乳類	骨幹		1	有	
S J 3	1141		哺乳類	関節片		1	有	
S J 3	1141		ニホンジカ	下顎第2大白歯	左	1	有	
S J 3	1141		哺乳類	破片		13	有	
S J 3	1143		哺乳類	破片		6	有	
S J 3	1222		魚類?	破片		1	有	
S J 3	1223		アオザメ	下顎歯	右	1	不明	
S J 3	1343		スズキ属?	椎体		1	無?	
S J 3	1403		ニホンジカ	大白歯?		8	有	細片
S J 3	1405		哺乳類	破片		19	有	
S J 3	1408		哺乳類	破片		10	有	うち3点骨幹
S J 3	1434		哺乳類	骨幹		13	有	同一破片含む?
S J 3	1449		イノシシ or ニホンジカ	脛骨	左	1	有	近位骨端、若
S J 3	1451		哺乳類	破片		6	有	
S J 3	1472		イノシシ?	第4足根骨	右	1	有	
S K 29	33		哺乳類	関節		1	有	
S K 29	41		ヒト	腸骨		1	有	
S K 32			哺乳類	破片		2	有	
S K 32	11		イノシシ or ニホンジカ?	肩甲骨		4	有	同一破片?
S K 32	88		ニホンジカ	歯		16	有	細片
S K 36		P 79No. 1	ニホンジカ	距骨	右	1	無	
S K 36		P 79No. 2	ニホンジカ	中足骨	右	1	無	近位、スパイラルフラクチャー、齧歯目の咬痕
S K 37			魚類	破片		2	無	
S K 37			哺乳類	破片		22	有	
S K 37			小形哺乳類	大腸骨		1	無	テンサイズ
S K 37			魚類	方骨	右	1	無	
S K 37			哺乳類	破片		1	無	
S K 37			魚類	角関節骨	左	2	無	2種あり
S K 37			魚類	角舌骨	左	1	無	
S K 45			魚類	破片		18	有	
S K 45			不明	骨端		1	有	
S K 45			イノシシ?	中節骨?		1	有	遠位

出土地点	遺物番号	層位	種名	部位名	左右	点数	被熱破	備考
SK45			哺乳類	破片		1	有	
SX1			哺乳類	破片		10	有	うち2点骨幹
SX1	1		ニホンシカ	脛骨	左	1	有	遠位端
SX1	2		哺乳類	破片		1	有	
SX1	3		哺乳類	破片		1	有	
SX1	6		哺乳類	破片		3	有	うち1点骨幹
SX1	7		哺乳類	破片		8	有	微細片多い
SX1	9		哺乳類	破片		7	有	
SX1	10		哺乳類	骨幹		1	有	
SX1	11		哺乳類	骨幹?		1	有	
SX1	13		哺乳類	破片		3	有	
SX1	15		哺乳類	破片		1	有	
SX1	16		哺乳類	骨幹		1	有	
SX1	18		ニホンシカ	中手骨		1	有	骨幹、Na15と接合
SX1	21		哺乳類	破片		1	有	
SX1	22		哺乳類	破片		1	有	古い割れ口で2点が接合
SX1	24		不明	破片		*	有	微細片
SX1	32		哺乳類	破片		14	有	
SX1	33		哺乳類	関節片		1	有	
SX1	34		哺乳類	破片		1	有	
SX1	36		哺乳類	破片		4	有	
SX1	37		哺乳類	破片		3	有	
SX1	38		不明	破片		1	有	
SX1	40		不明	破片		2	有	
SX1	41		哺乳類	破片		6	有	うち1点骨端(若)
SX1	42		哺乳類	破片		1	有	
SX1	43		不明	破片		1	有	
SX1	44		哺乳類	破片		7	有	
SX1	45		哺乳類	破片		2	有	
SX1	46		哺乳類	破片		1	有	
SX1	49		哺乳類	破片		9	有	
SX1	50		哺乳類	破片		7	有	うち1点骨幹
SX1	51		哺乳類	破片		6	有	
SX1	53		哺乳類	破片		3	有	
SX1	54		哺乳類	破片		4	有	
SX1	55		ニホンシカ	桡骨	右	1	有	遠位
SX1	56		哺乳類	破片		8	有	
SX1	58		哺乳類	破片		4	有	
SX1	59		哺乳類	破片		4	有	うち1点関節片
SX1	60		哺乳類	破片		3	有	
SX1	66		哺乳類	破片		9	有	細片を含む
SX1	67		哺乳類	破片		1	有	
SX1	69		哺乳類	破片		4	有	
SX1	70		哺乳類	破片		2	有	
SX1	72		不明	破片		2	有	
SX1	73		哺乳類	破片		5	有	
SX1	74		哺乳類	破片		2	有	
SX1	75		哺乳類	破片		3	有	
SX1	76		哺乳類	破片		7	有	
SX1	77		哺乳類	破片		4	有	
SX1	79		哺乳類	破片		3	有	
SX1	80		哺乳類	破片		1	有	
SX1	81		哺乳類	破片		3	有	
SX1	82		哺乳類	破片		2	有	
SX1	83		哺乳類	破片		3	有	
SX1	84		哺乳類	破片		2	有	
SX1	85		哺乳類	破片		1	有	
SX1	86		不明	破片		3	有	
SX1	87		イノシシ	種子骨		1	有	
SX1	88		哺乳類	破片		1	有	
SX1	89		哺乳類	破片		7	有	細片
SX1	90		哺乳類	破片		3	有	
SX1	91		哺乳類	破片		1	有	
SX1	92		不明	破片		1	有	
SX1	93		不明	破片		2	有	
SX1	94		哺乳類	骨幹		1	有	
SX1	95		哺乳類	骨幹		1	有	
SX1	99		哺乳類	破片		1	有	

出土地点	遺物番号	層位	種名	部位名	左右	点数	被熱痕	備考
SX 1	100		哺乳類	破片		4	有	うち1点敲打痕?
SX 1	101		不明	関節		1	有	
SX 1	102		不明	破片		23	有	細片
SX 1	103		哺乳類	破片		3	有	
SX 1	104		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	105		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	106		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	107		哺乳類	破片		8	有	うち1点骨幹
SX 1	108		不明	破片		1	有	
SX 1	111		哺乳類	破片		4	有	
SX 1	114		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	114		ニホンジカ?	脛骨	右	1	有	
SX 1	114		マサバ?	椎体		1	有	
SX 1	119		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	122		哺乳類	破片		7	有	微細片多い
SX 1	123		哺乳類	破片		4	有	微細片多い
SX 1	124		イノシシ or ニホンジカ	頸椎	右	1	有	前関節突起
SX 1	127		哺乳類	破片		1	有	表面に焼土付着
SX 1	128		哺乳類	関節片		1	有	
SX 1	129		哺乳類	破片		3	有	うち1点関節片
SX 1	130		哺乳類	骨幹?		1	有	
SX 1	131		哺乳類	破片		2	有	うち1点は骨幹
SX 1	133		哺乳類	骨幹		7	有	
SX 1	134		哺乳類	骨幹		1	有	
SX 1	135		哺乳類	破片		6	有	
SX 1	136		哺乳類	破片		6	有	
SX 1	137		哺乳類	破片		5	有	うち1点骨幹
SX 1	137		哺乳類	破片		5	有	細片
SX 1	139		哺乳類	破片		3	有	うち1点骨幹
SX 1	141		タイ科	前頭骨		3	無?	
SX 1	141		哺乳類	破片		3	有	打痕?
SX 1	146		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	147		哺乳類	破片		5	有	
SX 1	148		哺乳類	破片		2	有	
SX 1	159		哺乳類	関節?		7	有	同一個体?
SX 1	160		哺乳類	破片		15	有	
SX 1	163		哺乳類	破片		3	有	
SX 1	164		ボラ科	椎体		1	有	黄変
SX 1	166		ニホンジカ	中足骨		1	無?	
SX 1	167		イノシシ?	大腸骨		1	有	骨端、若
SX 1	170		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	178		哺乳類	骨幹		1	有	
SX 1	179		ボラ科	腹椎?		1	有	黄変
SX 1	179		哺乳類	肋骨		1	有	黄変
SX 1	180		哺乳類	破片		3	有	
SX 1	182		哺乳類	破片		1	有	
SX 1	185		不明	破片		2	有	哺乳類1点、不明1点
SX 1	186		ニホンジカ	中足骨		1	有	骨幹

(注) 点数の欄の中で\*印を付したものは、微細片となり計数困難であったものを示す。

#### 図版52 キャプション

1. 巻貝(×1)、2. ハマグリ(×1)、3. ヤマトシジミ(×1.4)、4. アオサメ右下顎歯(×2)、5. メジロザメ科左上顎歯(×1.5)、6. コイ科咽頭歯(×1.3)、7. スズキ属上前顎骨(×1)、8. マサバ?椎体(×2)、9. ボラ科椎体(×1.5)、10. クロダイ属?椎体(×2)、11. クロダイ属腎臓第2線(×1)、12. 小形哺乳類指骨(×2)、13. キツネ右下顎犬歯(×1)、14. 小形哺乳類大腿骨(×1)、15. イノシシ上顎第1門歯(×1)、16. イノシシ右第4足根骨(×1.2)、17. イノシシ種子骨(×2)、18. イノシシ左上腕骨(×0.8)、19. イノシシ左踵骨(×0.5)、20. イノシシ左第2足根骨(×1.5)、21. イノシシ末節骨(×1)、22. ニホンジカ右下顎第2門歯(×1.3)、23. ニホンジカ右楔骨(×1)、24. ニホンジカ中足骨(×1)、25. ニホンジカ右肩甲骨(×0.5)、26. ニホンジカ右距骨(×0.8)、27. ニホンジカ中足骨(×1)、28. ニホンジカ中足骨(×0.5)、29. 哺乳類骨幹破片(×1)、30. 打痕のある哺乳類骨幹破片(×1)、31. ヒト頭蓋冠破片(×1.2)



第10表 遺構新旧対照表

グリッド	旧番号	新番号	グリッド	旧番号	新番号		
		SK					
Aグリッド	1	SK 1	Dグリッド	50	SK29		
	2	P 4		51	SK30		
	3	SK 2		52	SK31		
	4	SK 4		60 P113	S J 3 P 2・3		
	5	SK 5		81 P120	P139		
	6	SK 6		82	P106		
	7	P 5		86	P118		
	8	P 7		87	SK33		
	12	SK 3		Eグリッド	53	S J 3 炉跡	
	10	SK 7			54	S J 3 P17	
	Bグリッド	8			P 7	55	SK39
		9			SK 8	56	SK40
11		SK 9	57		SK42		
13		SK16	58		P170		
36		SK12	59		SK46		
37		SK13	60 P113		S J 3 P 2・3		
38		SK10	61		P169		
39		SK17	62		SK47		
40		SK18	63		SK38		
41		SK19	64		SK43		
42		SK14	65	P161			
Cグリッド		43	SK11	66	P160		
	46	SK15	67	P162			
	14	S J 1 P10・14・15・16	68	P153			
	15	S J 1 P11・12・13	69	P152			
	16	S J 2 P 4・5	70	SK41			
	17	SK23	71	SK44			
	18	SK24	72	P181			
	19	S J 2 P 3	73	SK37			
	20	SK22	76	P144			
	21	S J 2 P 6	77	P146			
	22	P31	78	S J 3 P14			
	Dグリッド	23	P30	Fグリッド	79	P205	
24		SK25	59		SK46		
25		SK27	72		P181		
26		SK26	74		P198		
27		S J 2 P13	75		P201		
28		S J 2 P12	80		SK45		
29		S J 2 炉跡	88		P197		
30		S J 2 張り出し部	P i t				
31		S J 2 P 1	Aグリッド		1	P 1	
32		SK28			2	P 2	
33		SK21			3	P 3	
34		SK20			137	P 6	
Dグリッド	39	SK17		Bグリッド	16	P19	
	44	P29			18	P16	
	45	S J 2 P9			131	P18	
	50	SK29			132	P17	
	51	SK30			133	P11	
	84	P27			134	P10	
	85	S J 2 P 8			135	P 9	
	35	SK35			136	P 8	
	47	SK36	138		P206		
	48	SK34	139		P13		
	49	SK32	140		P12		
			141		P14		

グリッド	旧番号	新 番 号	グリッド	旧番号	新 番 号
Bグリッド	142	P15	Dグリッド	74	P72・73
Cグリッド	4	P28		75	P95
	5	S J 2 P 7		76	P96
	7	P32		77	P86
	8	P33		78	P93
	9	P35		79	P112
	10	P36		80	P113
	11	P40		81	P114
	12	P20・21		82	P111
	13	P24		83	P122
	14	S J 1 P 4		84	P122
	15	S J 1 P 3		85	P123
	17	P25		86	P105
	19	P23		88	P109
	49	P44		89	P110
	50	P45		90	P119
	51	S J 2 P 2		92	P117
	52	P39		93	P116
	53	P37		94	P90
	54	P26		95	P91
	56	P41		96	P87
	57	S J 2 P10		97	P85
	61	S J 2 P 7		98	P70
	62	P34		99	P98
	63	P51		100	P102
	64	P53		101	P103
	129	P69		102	P88
	130	P22		103	P101
	143	P38		104	P100
	152	P52		105	P99
	161	S J 2 P15		106	P104
	162	P49		107	P107
	163	S J 2 P14		108	P108
	164	P42		109	P120
	165	P43		110	P129
	166	P46		111	P134
	167	P47		112	P141
	168	P48		113 S K60	S J 3 P 2・3
	217	P204		115	P140
	欠番	P50		116	P138
	欠番	P54		117	P137
Dグリッド	44	P133		118	P135
	45	S J 3 P 1		119	P136
	46	P124		120 S K81	P139
	47	P128		121	P127
	50	P45		122	P125
	55	P70		123	P126
	59	P130		124	P115
	64	P53		128	P97
	65	P57		129	P69
	66	P58		144	P68
	67	P66		145	P67
	68	P81		146	P65
	70	P79		147	P78
	71	P77		148	P59
	72	P76		149	P60
	73	P74		150	P61

グリッド	旧番号	新 番 号	グリッド	旧番号	新 番 号
Dグリッド	151	P62	Eグリッド	183	P164
	152	P52		184	P166
	153	P56		185	P167
	156・157	P55		186	P168
	158	P63		187	P158
	159	P64		188	S J 3 P13
	169	P55		189	P151
	170	P71		190	P150
	171	P80		191	P154
	172	P83		192	P176
	173	P84		193	P175
	174	P89		194	P174
	175	P131		195	P182
	176	P132		199	P180
	欠番	P75		200	P179
	欠番	P82		201	P178
	欠番	P88		211	S J 3 P18
	欠番	P92		212	S J 3 P 6
	欠番	P94		213	S J 3 P 5
	欠番	P121		214	S J 3 P 7
Eグリッド	20	S J 3 P19	215	S J 3 P 4	
	21	P142	216	S J 3 P20	
	22	P143	欠番	P171	
	23	S J 3 P 9	欠番	P208	
	24	S J 3 P10	Fグリッド	33	P189
	25	P155		34	P190
	26	P156		35	P193
	27	P163		36	P199
	28	P157		39	P194
	29	S J 3 P15		40	P183
	30	P159		195	P182
	31	P173		196	P186
	32	P177		197	P185
	37	S J 3 P 8		198	P184
	38	S J 3 P16		202	P195
	41	P172		203	P191
	42	S J 3 P11		204	P192
	43	S J 3 P12		205	P188
	45	S J 3 P 1		206	P203
	48	P145		207	P202
60	P207	208		P200	
113 SK60	S J 3 P 2・3	209		P196	
114	S J 3 P21	欠番		P187	
176	P132	S J・S X			
177	P209	グリッド	旧番号	新 造 構 名	
178	P210	Aグリッド	S J 3	壁穴状造構	
179	P149	Aグリッド	S X 1	包含層	
180	P147	Eグリッド	S X 2	S X 1	
181	P148	Eグリッド	S J 5	S J 3	
182	P165				

## VI 結 語

### 1. 第3号住居跡について

第3号住居跡はこれまでに触れたように、明確な状態で全容が検出されたわけではない。黒色系の土層を掘り込んでいるために、生活面と覆土の判別が平面上からは困難であった。そのために堅穴の壁を確認することができず、また、床面を検出することも不可能であった。したがって、本住居跡の認定に関わる具体的な根拠は、第一に土層の堆積状態から炉跡を中心にして覆土が判別できたこと、第二に遺物分布状況に加曾利B2式土器のまともさが認められたことによる。

本住居跡は加曾利B2式期の希少な検出例になるものと考えられ、しかも、盛り土によってバックされたものであると認められる。この二つの事実は今後の研究に有益な情報を提供するであろう。この観点に立つて本住居跡の特徴を整理しておく。

#### (1) 構築・埋土状況

本住居跡の構築面は、貝塚が形成されはじめたと考えられるⅢ層堆積以降の黒褐色土である。この黒褐色土には、多量の焼土・炭化粒子に混じって哺乳類を主体にした動物の骨片や骨粉が含まれていた。土層観察時においてⅡ層とⅡ'層の二つの土層に分けたが、その目安は上記の人為による含有物の多少に拠ったものであり、ほぼ同質の土層であると考えられる（以下便宜上Ⅱ層土と記述する）。貝土坑である第37・45号土坑の覆土は、Ⅱ層土とほとんど同じ層相を見せており、Ⅱ層土が貝塚形成に深く関連する土層であることを裏付けている。Ⅲ層に貝類を含めて動物遺存体の含有が皆無であることを勘案すると、貝塚形成の開始時期は、Ⅱ層土堆積過程の加曾利B2式期からと考えられ、その形成過程でⅡ層土を掘り込んで本住居跡は構築されたのであろう。

生活面について一考しておくと、構築時の生活面は全体土層から判断できるようにⅡ層土中である。Ⅱ'層の堆積がかなり進行した段階、つまり、貝塚が形成されてかなりの時間が経過した段階の層にあたる。この

面には第39図に見られるように、SX1（以下焼土遺構と記述する）が検出されている。焼土遺構の焼土層が切れる面の下層からは、第40図1～7の後期前葉の土器が出土しているが、焼土遺構そのものの覆土からは同図8～12の土器が出土しており、加曾利B2式期の生活面と判断できる。本住居跡もほぼ単一な加曾利B2式土器の出土が認められ、隣接した焼土遺構と同じ生活面上に、しかも同時期に存在したものであるといえよう。

次に埋土状況であるが、要点は盛り土の形成にあるであろう。本住居跡は盛り土によって全体が埋まっている。しかも、生活面全体を覆うように盛られている。南北の全体土層からの観察では、Ⅱ層土の堆積が厚くなっていることが判明している（第7図 付図）。このⅡ層土は北方位にいくにつれて焼土・炭化粒子や骨片、骨粉などの含有量が希薄になる様子が窺えた。Ⅱ層とⅡ'層に分ける主因となった観察事実であったが、第1号住居跡を過ぎてBグリッドに入ると全く見受けられなくなる。貝塚形成以前のⅢ層が緩やかに傾斜していく地点にあたり、傾斜面が下がっていく場所にⅡ層土の堆積が認められないという事実は、Ⅱ層土が自然堆積に因らない堆積土であることを示している。また、第1・3号住居跡を覆うように堆積していることにも注意しなければならないだろう。このような土層堆積からⅡ層土は、貝塚形成時の人為的土壌の可能性と、焼土・炭化粒子や骨片、骨粉などの含有物を含んだ意図的な土壌の可能性が強まるものと考えられる。ここに盛り土としての埋土が考えられるであろう。層の厚さにおいても、加曾利B2式土器がほとんど主体であることから、自然堆積には不自然な層厚であると考えられる。Ⅰ層のローム質土に至ってはなおさらのことで、Ⅱ層土よりもさらに限定された範囲にしか堆積が認められない。Ⅱ層土の埋土によって高まりができたところに、さらに高まりを作るようにして土を盛り上げている様子が窺える。第3号住居跡を中心に盛り

土されている形跡が見られる。他にもニホ2所I層の堆積が認められる。一つは第35号土坑、もう一つは住居跡の存在が十分に想定されるCグリッドとDグリッドの境界地点に関連して見る事ができる。

以上のことから、第3号住居跡の埋土状況は、住居を覆う行為のなかで人為的に土を盛ることで生成したものであると考えられる。住居跡の覆土が、焼土・炭化粒子や動物遺存体の骨片骨粉を多量に含むなどII層土と似た層相をしているのは、盛り土行為と関連するからではないかと考えられる。

## (2) 遺物の出土状況

本住居跡出土の遺物は、D-2-3・E-2-1・E-2-3グリッドの平面と垂直遺物分布状況のデータから、土層断面及び炉跡と柱穴の並びなどを勘案して、住居跡内に含まれる遺物を抽出することでグリッド出土遺物と区別したものである。出土遺物の全データを第3表に、主な土器の分布状況と出土地点が明確な石器の分布状況を第16-22図に示した。なお、住居跡内P2・3出土の遺物分布については図示していない。

データ分析から、次のことが指摘できるであろう。

- ・遺物の垂直分布は、1層と2層、II層に多く認められ、床直には少ない。動物遺存体の骨片や骨粉も同様な状況であった。
- ・遺物の平面分布は密度が濃く、敷き詰められたかのような感じさえ受ける。土器も石器も炉跡を中心にして周囲に、しかも住居跡内全体に分布している。
- ・接合した土器の平面分布は、同じようなレベルで分散している傾向がある。いずれも加管利B2式土器の範疇に属するものである。
- ・覆土内には一部後期前葉の土器が混入していたが、第39号土坑に見られるように、住居構築時に該期の遺構を壊した結果である。したがって、覆土内出土の土器は加管利B2式期に属するものである。
- ・完形土器の出土は皆無といってよく、欠損したものばかりといえる。石器もまた欠損品が目立ち、原形に近いと考えられるのは、磨石と敲石ぐらいである。

・土器の底部の出土量が際立っている。復元できた個体数は6個体あり、それ以外に56点の数量を計る。この数量だけの個体数があったことがまず想定されるが、そのすべての数量でないとしても、一軒の住居の土器保有数としては破格の多きであろう。

・P2とP3には20点ほどの動物遺存体の骨片が出土した。特にニホンジカの中足骨の出土(図版8)は、ニホンジカ中足骨製の骨角器が出土した第36号土坑と同じように意図的なものではないだろうか。第37・45号土坑の貝土坑とともに出土状況に特異なものがあるだろう。

・住居跡覆土内に含まれていた動物遺存体は、哺乳類を主体に魚類や貝類などであるが、大部分が熱を受けていた。その多くが亀製の入ったほぼ極限まで焼かれたものであった。人骨(頭蓋冠片)も一点出土しているが、同じ状況であった。これらの骨類の分布は、炉跡から南西方向に顕著に見られる(第91図)。焼土遺構との関連性が考えられる。

以上の指摘は調査時の所見を主眼において、データの分析から導いたものである。ことに本住居跡が指し示す情報のなかで看過できないことは、一つ目に、破損遺物の多量出土と住居跡内全域出土という量と分布の状況及び出土のあり方に関すること、二つ目に、住居跡の覆土が、焼土・炭化粒子や動物遺存体の骨片骨粉を多量に含むなど、貝塚住居の一面を有する反面、焼骨の多量出土が隣接する焼土遺構との関連で考えられ、通念としてのごみ捨て場観に一考を促す面があるであろう、という動物遺存体の捉え方に関すること、三つ目に、意図的と思われる獣骨の出土状況に関することなどである。

これら遺物の出土状況から導かれた三つの観点は、今日までの研究で提起されてきた土器の廃棄に関わるパターン論や、貝塚の物捨て場論だけでは理解しえない問題を提示しているといえるだろう。

## 2. 焼土遺構 (SX1) について

本遺構は第3号住居跡に隣接し、同じ生活面に構築された点にまず大きな特色がある。次に、多量の動物遺存体の骨片骨粉を含み、現存する骨片のすべてが亀裂が入るまで焼かれている点に注目したい。さらに、焼土上面において翡翠製の垂飾、石鏃がほぼ同じレベルで並べられたように出土した事実をあげることができ(第39図)。規模は確認面と焼土の切れ目を目安として、長軸を南北にとり約1.4m、短軸1m、最深部で0.4~0.5mである。

このような遺構の検出例は、稀少といえるだろう。灰を含んだ焼土層が、これほどの厚さで堆積すること自体稀な例であろう。盛り土遺構が検出された栃木県守野東遺跡では、0.5~2m前後の平面ブロック状を呈し、層厚が10cmほどの灰を含んだ焼土層が確認されているが、この例も検出地点で焼く行為が営まれたと考えられている(注)。本遺跡と同じように黒色系の土層に挟まれていることや、焼土・炭化粒子や骨粉などを多量に含むなど共通点が多い。さらに、黒色土層から住居跡(安行1式期)が覆られている状況も同じである。しかし、遺構の規模と出土遺物や骨片の状況は、守野東遺跡とは少し異なっている。

もう一つ着眼しなければならぬことがある。前述の第3号住居跡に関連して触れたことだが、焼土遺構

が第3号住居跡と同時期同じ生活面に存在したと考えられることと、焼土遺構に含まれていた動物遺存体の種と住居跡覆土に含まれていたものがほぼ一致し、しかも住居跡内の骨片のほとんどが焼けているという事実である。この分析結果は、第3号住居跡と焼土遺構が極めて密接なものとして隣り合っていたことを示すと考えられる。主客の関係で考察すれば、より焼土遺構に近い第3号住居跡南西側に焼骨の分布が濃密であることから、住居の埋土に直接関わった施設として焼土遺構が位置付けられていたと考えられるのではないだろうか。つまり、住居の埋土時に焼土遺構が主体的な役割を果たしたと想定される。焼かれた骨は、住居の廃絶に関わって何らかの意味が込められていたものと推察される。動物の骨だけではなく、焼かれたヒトの頭蓋冠破片も第3号住居跡から出土している(第9表 P148参照)事実からすると、ヒトの死と住居の廃絶に何らかの相関関係があり、そこに特別な意味が付けられていた可能性を指摘しておきたい。

(注) 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団 1994 『守野東遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第152集

## 3. 加曾利B式土器

### はじめに

石神貝塚の今回の調査では加曾利B式土器のややまとまった資料が出土した。特に第3号住居跡とグリッドから多くの出土があり、本文中では両者を同様な基準によって、22の類に分けて説明した。

この中には第1類の3単位把手を有する土器のように分類基準の明確なものもあれば、第2類のようにいくつかのタイプの土器を集めた類もある。破片で分類が困難な場合、第9類のように複数器種をまとめた場合もあるし、胴部の破片を一括した第10類などもある。挿図は精製から粗製、深鉢から他の器種という形で構

成したので、分類もおおよそこの順で行った。

今、第3号住居跡とグリッド出土土器を比較すると加曾利B1式の古い部分を中心とする第2類a、第6類a、加曾利B3式を中心とする第4類などがグリッドからは出土しているものの第3号住居跡からはごく少量の出土を示しており、第3号住居跡出土土器の主体が加曾利B2式に限定しようと予測される。

ここでは第3号住居跡出土土器をどのように捉えていくか、問題点と今後の課題について考えていきたい。

なお、加曾利B式研究は80年代を中心に安孫子昭二氏、鈴木正博氏、大塚達朗氏による研究があることを

承知している。

しかし、今回は限られた紙数に於いての報告を主眼とするため、適宜引用させていただいた。諸氏の研究成果の上に立って考察していきながら、研究成果として未消化の部分も多分にあると思う。別に機会を持ちたいと思うのでご寛容いただきたい。

### 出土土器の分類

本文中では煩雑になるため、個々の類別の時期については記さなかった。後段の検討と多少前後してしまうが時期について簡単にふれ、問題となる第3号住居跡における出土傾向について記しておきたい。第92・93図に代表的な土器をあげ、分類の概要を示した。

第1類は安孫子昭二氏によって加曾利B式の変遷系統の標識とされた3単位把手を有する深鉢形土器である(安孫子1982他)。第92図1(本文中第23図1…23-1と略、以下同様)は加曾利B1式、2(59-1)、3(59-4)は加曾利B2式前半と考えている。時期については後述する。1は並行沈線文、2は菱形文、3は入組文を主文様とする系統である。

第2類は第1類と主文様が運動する形で出現する各種の深鉢形土器である。平口縁深鉢形土器(a・b)、波状口縁深鉢形土器(c)、鈴木正博氏による「加曾利B1-2式中妻系列」(鈴木1981)として知られる土器(d)などがある。胴部をeとして一括したが第1類との区別は難しいものも含んでいる。また遠部第三類の一部を構成する土器をfとした。第2類は第3号住居跡からも出土しているが、第1類に比べると少なく、完存度の高い土器も少ない。

第1類aは加曾利B1式、b-eは加曾利B1式～B2式、fは加曾利B2式である。第92図にあげた土器は4、6、7が加曾利B1式、5、8が加曾利B2式と考えている。第92図には第3号住居跡出土土器の中から時期的に微妙なものやB1式をあげたが、cには28-36、29-2、dには28-37のような加曾利B2式段階の土器があることも付け加えておく。

第3類は括れを有し、括れ部から口縁部へ外傾して

立ち上がる形態の深鉢形土器で、沈線文系の土器群である。aは口縁部が外傾する形態の深鉢形土器である。加曾利B2式と考えられる。第17類と同様な器形を有している。9(24-3)と10(24-4)は一見類似するが、9はよく研磨された精製土器であるのに対し、10は器面に擦痕を残し、第17類に近い。10以外はおおむね研磨された精製土器と考えて良い。b、cは鶴川遺跡群M地点(安孫子他1972)などでまとまっており、西関東系の土器群と考えられている。加曾利B2式からB3式にかけての土器群と考えられる。dは胴部で括れるその他の沈線文系土器を一括したものである。平縁・波状縁、刻みの有無、口縁部施文帯の有無などの違いがある。加曾利B2式である。

第3類については第3号住居跡においてある程度の上出頻度を示すが、その成立と展開について、今回は検討することができなかった。

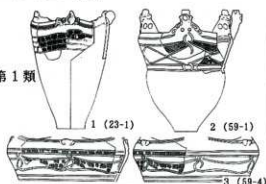
第4類は5単位の波状口縁深鉢形土器である。加曾利B3式が中心である。グリッド出土土器に比べ第3号住居跡からの出土頻度は低い。

第5類には各種の土器をまとめた。aは16(24-1)の1点のみで、第3号住居跡からの出土である。精製土器の平口縁系の口縁部である。第17類の主文様を施す。bは大波状の口縁部を有する特徴的な土器であり、東日本広域に分布する形態の土器である。17(24-2)は鋸歯状区画の沈線文を施す。第3号住居跡からの出土である。cはいわゆる遠部第五類土器(池上1937)と呼ばれる磨消縄文系の土器である。dは口縁部内外面に縄文帯を有する土器を一括した。破片が多く、分類はこの縄文帯に拠ったため各種の土器があると思われる。20(11-2)は第1号住居跡の類別である。内面に弧線区画による磨消縄文、外面に矢羽根状沈線文を施す土器であり、2種の文様の同時性を示す資料である。dは第3号住居跡からの出土はなかった。第5類a-dは加曾利B2式と考えている。

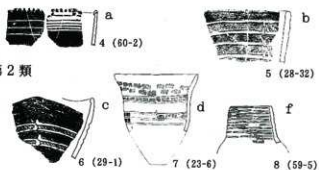
第6類は内文が発達する鉢形土器(a・b)とその変化である口縁が内傾して立ち上がる鉢形土器、浅鉢形土器である(c)。後述の区分によればaは加曾利B

第92團 出土土器(i)

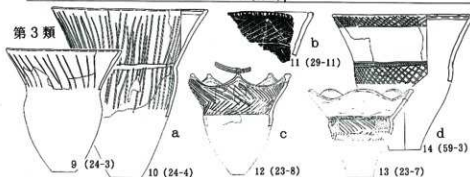
第1類



第2類



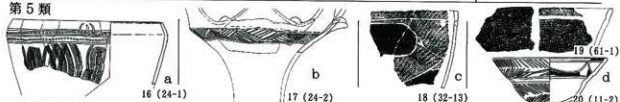
第3類



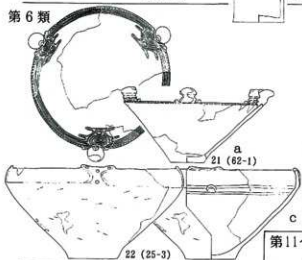
第4類



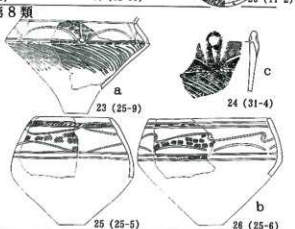
第5類



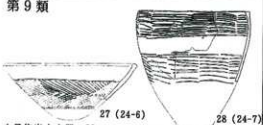
第6類



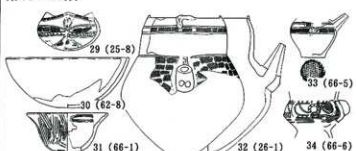
第8類



第9類



第11~15類



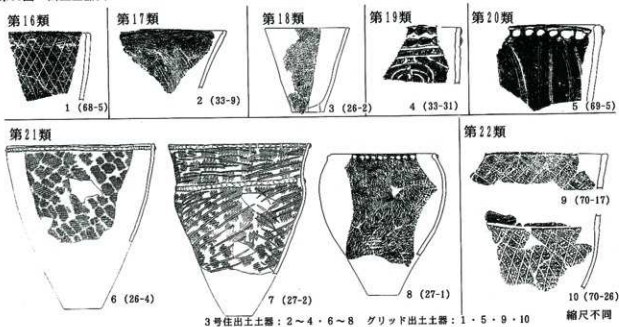
1号住出土土器: 20

3号住出土土器: 1・5・7・9・13・16・18・22・29・32~34

グリッド出土土器: 2~4・8・14・15・19・21・31 縮尺不同



第93図 出土土器(2)



1式古段階、bは加曾利B1式中から新段階、cは加曾利B2式である。21(62-1)は加曾利B1式古段階、22(25-3)は加曾利B2式であろう。21については堀之内2式とする異論もあるかと思う。第3号住居跡ではa・b類は少なく、cがまとまっている。

第7類は並行沈線文を施す鉢形土器である。加曾利B1式が主体で一部B2式である。グリッド、第3号住居跡ともに出土頻度は低く、第92図では省略した。

第8類aはいわゆる算盤玉の形態の鉢形土器である。第3号住居跡における出土頻度はやや低い。23(25-9)は体部に条線が施されており、条線文が盛行する加曾利B3式の可能性がある。bは体部中位から内傾して立ち上がる形態である。文様は25(25-5)の弧線文、26(25-6)の入組文のほか、帯状弧線文、並行沈線文など各種がある。加曾利B2式前半の深鉢形土器の文様と対応する。第3号住居跡ではややまとまっている。cは口縁部が直立気味に立ち上がる形態の土器である。グリッド、第3号住居跡ともに少量の出土である。第8類は大多数が加曾利B2式であろう。

第9類は遠部第二類土器(池上1937)と幾分変容した土器を含んでいる。28(24-7)が幾分変容した土

器と思われる。口縁部にも一定幅に文様が施文される。少なくとも遠部第二類中には見いだせない。

第10類は第8類、第9類などの胴部破片を一括したもので、第92図においては省略した。

第11類は弧線文系を主体とする浅鉢形土器、第12類は無文の浅鉢形土器、第13類は分頸外の浅鉢形土器、鉢形土器、第14類は注口土器、第15類は奥形台付土器、釣手土器である。第11類、第12類、第14類は第3号住居跡から出土しており、これらは加曾利B2式と考えられる。第14類(注口土器)には東北系の曲線的な磨消縄文の土器(32-18-19)、器面を削って浮き彫り状の文様を施した土器(32-20)などがある。32(26-1)も加曾利B2式であろう。なお、グリッドからは33(66-5)のほか、加曾利B1式の注口土器が出土している(66-7-11)。

第93図には粗製土器をまとめた。第16類は格子目文を主体とする沈線文系土器、第17類は櫛歯状工具による条線文を施す土器、第18類は器面全体に縄文を施す土器、第19類~第21類は紐線文系土器、第22類は遠部第五類土器(池上1937)である。紐線文系土器は第19類が口辺部に文様を施すもの、第20類が縄文を施さないもの、第21類が縄文を施すものである。時間的には

第16類、第19類が加曾利B 1式、第17類、第20類、第22類が加曾利B 2式、第18類、第21類が加曾利B 1式～B 2式に相当しよう。出土頻度はグリッド、第3号住居跡ともに同様な傾向にあり、加曾利B 2式の紐線文系土器について見るならば、縄文系の土器(第21類)が多く、非縄文系の土器(第20図)は少ない。これは当遺跡の地域性を示すものと考えられる。

#### 遠部土器群について

80年代の安孫子昭二氏、鈴木正博氏、大塚達朗氏による論議の中で、3者に共通するのは遠部包含地の土器群(池上1937)を加曾利B 2式とする点である。

言うまでもなく遠部包含地の土器は山内清男氏によって、加曾利B式の中位の古さとして位置づけられている(山内1939)。

池上啓介氏の分類に沿って、第3号住居跡における類似土器を抽出したのが第94図である。时期的な違いだけでなく地域的な変容を示す資料は他にもあると予想されるがここでは比較的類似の度合いが強いものを集めたつもりである。とはいえ、写真図版との比較なので誤解があるかもしれない。

遠部第一類土器は当遺跡の縄文施文の紐線文系土器のうち「口縁部の稍々外反する」形態的特徴のものを示した。遠部第二類土器は遠部包含地の中心的な精製土器で各種の器形がある。第9類、第10類の一部を示した。遠部第三類土器は比較的少なく、特に「縄状隆起線紋」を施した土器が少なかった。遠部第四類土器は第22類そのものであろう。遠部第五群土器については曲線的な文様を施す土器として、第5類cと第14類の一部が相当しよう。しかし文様が全く同じと言うものばかりではなく、磨消縄文と言うだけでいささか強引に第94図には取り上げた。また、鈴木正博氏、大塚達朗氏が指摘されているように、遠部第五類土器の中には弧線文を施す磨消縄文の土器、蛇行沈線文の土器がある(鈴木1980、大塚1989)。算盤玉形の形態の鉢形土器等との同時期性が指摘されているわけであるが、いささか煩雑になるので第94図には示さなかった。

ところで、石神貝塚は大宮台地のほぼ南端に位置し

ており、下総台地とは間に中川低地を挟む位置にある。対岸の中川低地に面した下総台地には市川市の貝塚群がある。水系の違いがあるので単純な比較はあまり意味がないが、大宮台地北端に位置する赤城遺跡と下総台地の遠部包含地は石神貝塚からほぼ等距離にある。埼玉県内の遺跡の中では奥東京湾西岸の東京都下の諸遺跡とも近い位置に立地している。

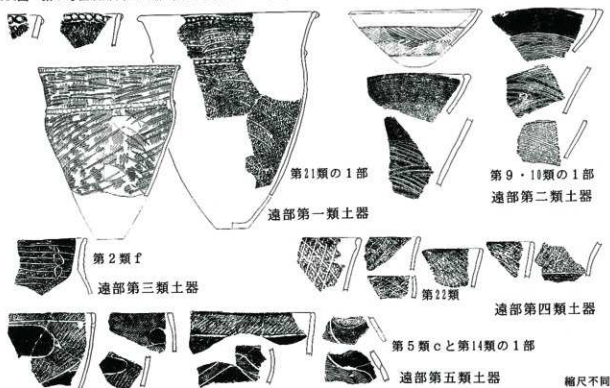
石神貝塚の立地的条件から東関東的な加曾利B 2式が比較的安定して組成の中に含まれていると言える。また先にもふれたように时期的な面では第94図の土器をもって加曾利B 2式とすることはあまり異論はないと思われる。問題は当遺跡において安定して存在する第94図に示した遠部包含地類似の土器とどの土器が同時期といえるのかという点に尽きるだろう。研究者によって大きく見解を異にする問題点である。

#### 加曾利B 1式土器について

遠部包含地の土器群と同時期の土器について言及する前に加曾利B 1式についてふれておく。ひとつには加曾利B 1式の主として新しい部分を第3号住居跡出土土器群から抽出することにより、加曾利B 2式の内容を明確化するためであり、また第3号住居跡で出土した3単位把手を有する深鉢形土器などが加曾利B 1式からどのような段階を辿って成立するかを明らかにするためである。

鈴木正博氏は加曾利B 1式の主文様の変遷を6段階において考察されている(鈴木1981)。鈴木正博氏は加曾利B 1式の次に加曾利B 1-2式をおかれている(鈴木1980他)。安孫子昭二氏は3単位把手を有する土器の第II、III段階を加曾利B 1式とされる。安孫子昭二氏と大塚達朗氏の加曾利B 1式と加曾利B 2式の境界の相違は例えば入組文系の土器を加曾利B 1式とするか加曾利B 2式とするかに端的にあらわれており、安孫子昭二氏はこの種の土器を3単位把手の深鉢形土器との対応から3単位把手深鉢第IV段階とされる。大塚達朗氏は加曾利B 1式を区切り手法の変化によって区分する。氏の論考は区切り手法の変化そのものよりも長円形文、ひし形文、磨消円弧文など加曾利

第94図 第3号住居跡出土土器（遠部包含地との対比）



B2式へと移行する要素を指摘した点で重要だと考える。加曾利B1式から加曾利B2式への変化がより具体的に伝わって来るからである（大塚1983）。

大塚達朗氏が考察された変遷は資料の充実によって検証される性質のもので筆者は考えている。実際の出土状況として大塚氏は西富貝塚第1号址出土土器についてふれられ、床面出土と覆土出土土器の新旧を指摘された。しかし、西富貝塚第1号住居跡出土土器を単純に2段階の所産とされているわけではない。

昨年、縄文セミナーにおいて、加曾利B式についてのシンポジウムがあった（縄文セミナーの会1996）。加曾利B式を巡る型式学的研究に住居跡の一括資料を対比させ段階的区分が行われており、中期などでは普通のことであるが、加曾利B式研究にとっては主流とは言いがたい内容であった。加曾利B1式について見た場合、大塚達朗氏の細分が生かされていたであろうか。また、鈴木正博氏の加曾利B1式の主文様の段階的変遷が生かされていたであろうか。

秋田かな子氏は西富貝塚1号址をB1式新段階の所産とされる。一方、菅谷通保氏はB1式の中、新段階

を設定される。秋田かな子氏の中段階と菅谷氏の古段階が同様な内容であるので、菅谷氏はB1式の後半部分をより細分されている（菅谷1996、秋田1996）。

筆者は器種をある程度網羅した上で、段階の設定を行う分類を赤城遺跡の報告書において行ったことがある。その結果、加曾利B1式は3段階、加曾利B2式は2段階に区分され、加曾利B1式の中頃の段階に赤城遺跡第13号住居跡出土土器、加曾利B2式後半に同第12号住居跡出土土器をおいた（新屋他1988）。

加曾利B1式について言えば、秋田かな子氏の3段階区分と同様の見解である。具体的に資料についてふれていく。第95図は加曾利B1式中段階の資料である。堀之内2式との間にはもう1段階が想定されるが、今回は加曾利B2式への変化が主題なので省略する。赤城遺跡13号住居跡と秋田かな子氏が中段階とされた向遺跡2号住居跡（横尾藤雄1991）の土器をあげた。

第95図は深鉢形土器の並行沈線に区切り沈線が定着し、内文は前段階に比べると刻みか退行する段階である。菅谷通保氏は「鉢形土器胴部文様への単位紋進出 外削ぎ状口唇の普遍化の段階」とされ、ぶら下が

るように描く単位文についての指摘や「単位紋を持つ鉢形土器と持たない深鉢形土器の組み合わせが想定」できるとされている(菅谷1996)。確かに現状では単位文を施さない深鉢形土器が顕著である(第95図1、2、9、10)。しかし、3単位把手の深鉢形土器との対応で行くと、第II段階の下北原遺跡例(第97図6)が対応し、この土器は単位文を有している。こうした細部については今後、一括資料によって検討しなければならぬ。ただ次の新段階においても入組文系の文様が鉢形土器を主体として現れる可能性があり(第96図12など)、菅谷氏の指摘は興味深いと考えている。

第96図は加曾利B1式新段階の資料である。菅谷通保氏が中段階とされる雅楽谷遺跡3号住居跡出土土器(橋本1990)、秋田かな子氏が新段階とされる西富貝塚1号址出土土器(寺田1964)である。

内文が口縁部内面の稜線のみに行ずる段階である。

鈴木正博氏によって指摘されている「お玉杓子文」、「玉泡き対弧文」(鈴木1981)などが顕著である。また大塚達朗氏が指摘されている「一つの細帯を二つの点列に近い沈線で区切っている」土器が多く、「長円形文」(第96図10、11)、「ひし形類似の単位文」(第96図12)、「磨消円弧文」(第96図19)などもあり、多様性が認められる(大塚1983)。第96図25は「磨消円弧文」が浅鉢形土器に横帯文を持たずに単独で施文されている。従来は内文を有し、外面が無文の鉢形土器から変化した形態の土器である。多く見られる土器ではないが、加曾利B2式に算盤玉形の深鉢形土器が現れる説明にはなろう。第96図24は内文が継承されているが、横線は点文によって区切られている。

格子目文土器も横帯中に施文されたり(第96図13)、雑然とした文様(第96図27)がある。雅楽谷遺跡3号住居跡では第96図28-30にあげた以外にも粗製土器が多く出土しており多様性が認められる。

3単位把手を有する深鉢形土器として、西富貝塚第一号址床面から出土した土器がある(第96図1、2)。中段階とした第95図9、10などと比べると内文がなく

なり、把手もより立体的になっている。当遺跡第3号住居跡から出土した加曾利B1式(第97図1)も新段階であろう。

第97図1は区切り沈線が古い様相を示すことから、論者によってはより細分化して考えるところであろう。第97図1や第97図7の西ヶ原例を加曾利B1式の終末としない論者もいるであろうから慎重な言い回しをすれば、加曾利B1式の並行沈線文系土器と加曾利B2式段階の土器(第97図2-13)の間には飛躍があるように見える。しかし他の器種で、例えば当遺跡の第6類のような内文を持つ浅鉢形土器に大きな飛躍(bとc)がなく、連続性がある点を見ると、時間軸を形成する土器群の必要性をあまり考えてはいない。大塚達朗氏が分析された西富貝塚の鉢形土器(第96図12)や「先史土器図譜」(山内1939)の福田貝塚の鉢形土器をはじめとする土器群(大塚1983)を介在させて、第97図2のような加曾利B2式が成立したと考えるのが現状の説明としてひとつの考え方と思われる。

後述するように第3号住居跡出土土器の主体を加曾利B2式前半と捉えているが、第1・2類の一部は諸遺跡の状況に照らして、加曾利B1式と捉えたい(23-1・6、28-20-22・33・38、29-1)。

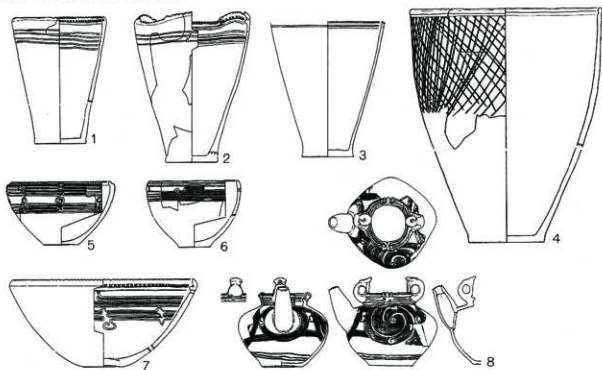
### 3単位把手を有する深鉢形土器

加曾利B2式の3単位把手を有する深鉢形土器である。赤城遺跡の報告においては加曾利B2式を前半と後半に2分して考えた。その際、深鉢形土器のC3類を安孫子昭二氏の第IV段階と第V段階に当てたつもりである。このことは大谷場例(第97図9)と小仙塚例(第97図11)を新旧として、他の土器に当てはめることが筆者には困難であったことを意味しているが、詳しくはその説明をしない。

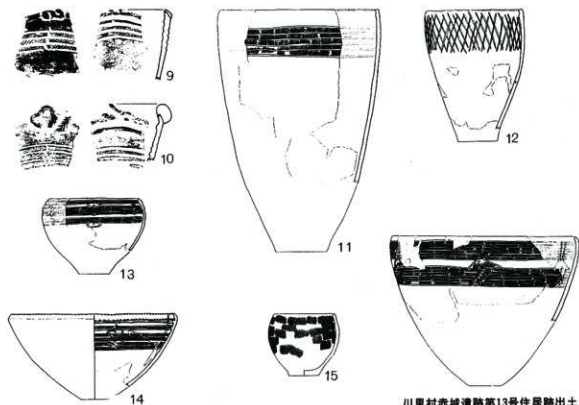
安孫子昭二氏は大谷場例と小仙塚例の相違を全体の器形、把手、頸部の文様等から説明されている(安孫子1982)。その後、西ヶ原例と大谷場例の間に寿能例をIVa段階としておかれ、西ヶ原例からの円滑な変化が看守できるとされている(安孫子1988)。

まず、西ヶ原例と大谷場例に限定する。全体の器形

第95図 加曾利B I 式中段階の様相



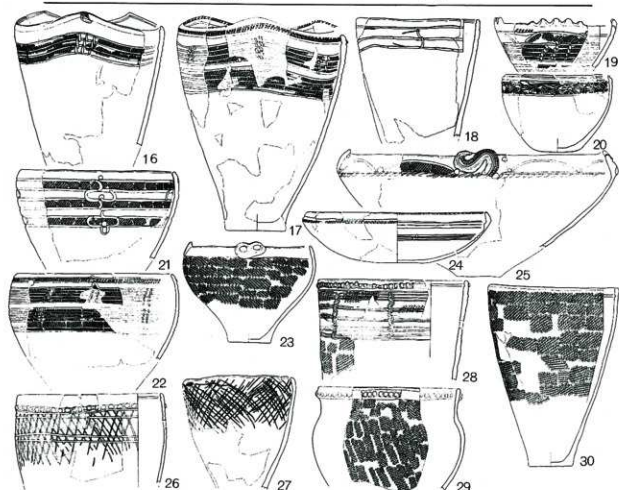
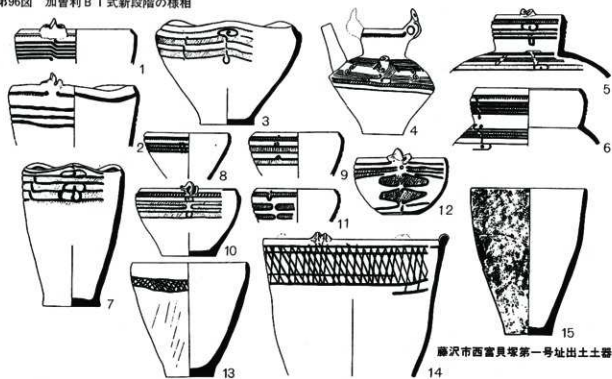
町田市向遠跡2号住居址出土土器



川里村赤城遠跡第13号住居跡出土土器

縮尺 1~8、11~16: 1/6 9、10: 1/4

第96図 加曾利BⅠ式新段階の様相



縮尺 1~25: 1/6 26~30: 1/8

遠田市雅湊谷遺跡3号住居跡出土土器

は確かに相違が見られる。しかし、把手については一  
系列の時間的変化に置き換えられるかという疑問を  
もっている。加曾利B1式の段階から把手には横「8」  
の字の突起が鉢形土器に認められ(第96図23)、加曾利  
B2式においても磨消弧線文を施す鉢形土器にしばし  
ば付される。小仙塚例とは別の系統の把手と見ている。  
頸部の縄文帯と刻文帯の相違についても並立する2者  
があると考えている。類別が増加してくると、第IV段  
階の土器の特徴が小仙塚例の特徴とも連鎖してしま  
う。例えば、西ヶ原例と大矢場例の間に主文様の変  
化から寿能例をおくと、器形、刻文帯の特徴から小仙  
塚例と同じという矛盾が生じる。

それでは第3号住居跡(第97図2~4)の土器群に  
ついて見てみよう。2は入組文を主文様に施した土器  
であり、類別として第97図10の平尾例(安孫子1971)  
がある。平尾例の場合、横「S」字状の入組文を横位  
に連続させ弧線文との間を縄文施文とするが、2は本  
文中においてもふれたように弧線内に縄文を施する  
箇所と平尾例のように弧線内に磨消部とする部位があ  
る。また2は入組文によって菱形のモチーフを施し、  
平尾例より複雑な構成をとっている。より文様から近  
い類別としては大塚達朗氏が加曾利B2式初頭と考えら  
れている福田貝塚出土の鉢形土器(杉山1928)がある  
(大塚1983)。第97図2は器形、把手は大谷場例に似  
るが、古い要素と見られている突起下の「川」の字状  
の沈線や弧線間の「( )」状の沈線も同居しており、頸部  
は小仙塚例と同様な刻文帯である。安孫子氏の第IV・  
V段階の資料の要素と連続する特色が認められる。

突起等の作りから見て2と3を時間的に区別する理  
由はない。3は把手下と弧線文のつなぎめに「川」の  
字状の沈線を施す。現状の資料からは加曾利B1式新  
段階の弧線文の成立(第96図19、25)や同時期の入組  
文系土器の文様(第97図2)との類似性から、その成  
立について一定の説明は可能である。少なくとも入組  
文系土器から一系的に成立する土器ではなく、別系統  
の主文様と捉えた方が、例えば算盤玉状の鉢形土器の  
口辺部文様の2者(算盤玉状の鉢形土器の適用ではな

いが第92図25と26の関係)を理解しやすい。

第97図4、5についても弧線文の間に施される文様  
が3のように「川」の字状の沈線ではなく「( )」状の沈  
線であるが、2の「( )」状の沈線と「川」の字状の沈  
線の同時施文を考えると、3→4、5と考える積極  
的な理由もなく、3→5は縄文帯間に弧線文を施すと  
いう主文様でよく似た作りの土器である。5について  
は把手の形状が小仙塚例(第97図11)に類似している。

2の区画内にはかすかな痕跡のLRの縄文と擦痕が  
認められる。弧線文区画内を擦痕とする東谷例(第97  
図12)との連続性を窺わせる要素と思われる。

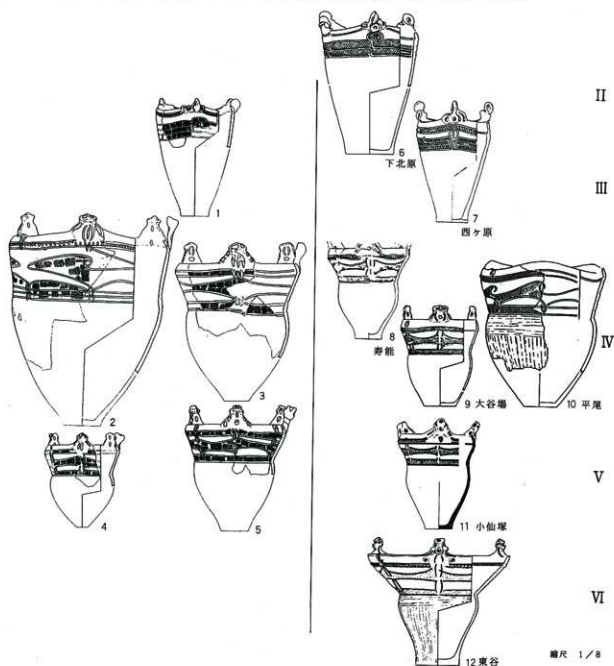
以上のように、把手、口辺部の2者(刻文帯と縄文  
帯)、主文様(弧線文と入組文)、承踏の論証が不十分で  
あるが「( )」状の沈線などによって新旧を判断する基  
準を筆者は持たず、安孫子昭二氏の第IV、V段階を加  
曾利B2式前半として捉えたい。

もちろん特定の段階に複数の承踏の中の、把手や主  
文様など特定の要素が盛行することは考えられる。す  
なわち大谷場例、小仙塚例を新旧と捉え、遺構におけ  
る一括資料で検証できればいいわけである。

秋田かな子氏は3単位把手の変遷に照らして、加曾  
利B2式古段階に大磯町石神台遺跡SX01(鈴木他  
1992)、中段階に平塚市王子ノ台遺跡20号配石出土土  
器をおかしている。また菅谷通保氏、林克彦氏もB2  
式を3段階に区分される(縄文セミナーの会1996)。

石神台遺跡SX01は大谷場例と類似する把手の完  
形土器がまとまっている。しかし、主文様としては小  
仙塚例に類似するものもあり、加曾利B2式前半の良  
好な一括資料と考えている。入組文系、弧線文系以外  
の主文様として、菱形文、帯状弧線文、緩い弧線文に  
よる横帯磨消縄文などがより多様性に富んでいる。緩  
い弧線文による横帯磨消縄文は長野県八雲遺跡1号ブ  
ロック(百瀬1988)においてまとまっている。なお、  
八雲遺跡1号ブロックの3単位深鉢形土器の把手正面  
は平滑に整形される地味色があるが、小仙塚例に類似  
している。2期区分とすれば、とりあえずの矛盾はな  
いと思われる。

第97図 3単位把手を有する深鉢形土器（第3号住居跡出土土器と安孫子昭二氏の組列との対比）



安孫子昭二氏の第VI段階以降に相当する資料は第3号住居跡において少なかった（第28図29～31）。

東谷段階の一括資料として第98図を示しておく。赤城遺跡第12号住居跡では3単位把手を有する深鉢形土器（1～3）に各種の土器を伴っている。磨消縄文の一群は加曾利B3式へ継続する要素として11や13などがあげられる。胴部に磨消縄文を施す13は竹管文が施され、東北地方に伝統的な施文手法をとっている。

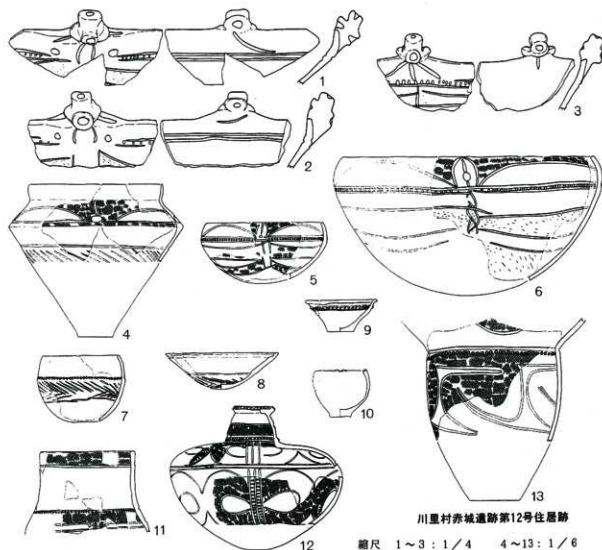
#### まとめ

第3号住居跡出土土器は安孫子昭二氏の3単位把手の深鉢形土器の組列との対比からみて、第III段階、第VI段階の資料が少なく、第IV・V段階の一括資料として捉えてきた。

加曾利B1式からの変化を若干検討し、加曾利B1式新段階の資料を他遺跡の一括資料との対比から一部含むと考えたが、第94図に示した遠部包含地の土器に



第98図 加曾利B 2式後半の様相



川里村赤城遺跡第12号住居跡

縮尺 1~3: 1/4 4~13: 1/6

第97図2~5の土器が先行するという考えや第97図2~5を細分して遠部包含地以前の段階、ないしは共伴する段階を設定するという積極的な根拠を見いだせなかった。

加曾利B 2式前半は遠部包含地土器群と第97図2~5の3単位把手を有する深鉢形土器をはじめとする土器群で構成されると考えたい。

筆者は加曾利B 2式を2段階に区分するが、千葉県では加曾利B 1式と加曾利B 2式にかなりの飛躍があることになる。この点は今後の課題である。

鈴木正博氏の加曾利B 1-2式(鈴木1980他)や安

孫子昭二氏の区分(安孫子1989)に見るように典型的な遠部包含地の土器と加曾利B 1式との間に段階を設定しようとする考えは多い。また、大塚達朗氏は「寿能遺跡第10地区の土器の重要性は、B 2式の細別に関し遠部包含地以前に遡る様相の検討をかなり具体的にうながしている」とされ、加曾利B 2式の細別を示唆されている。三者三様である。

関東の東西に及ぶ有意な段階区分をするため、加曾利B 2式をどう考えるか、筆者の区分案はかなりの課題を残していると思っている。また、ここでふれた以外の土器が加曾利B 2式後半にどのように継続していく

のか、断絶はあるのかといった問題を明らかにできなかった。特に第3類の沈線文土器群については加曾利B2式後半やB3式への展開上、どのように考えればよいかという問題もある。加曾利B2式後半一括

資料が少ない現状では遺跡間の対比が必要であるのだが、今回は余裕がなかった。あわせて今後の課題としたい。

#### 引用・参考文献

- 秋田かな子 1996 『南関東西部の様相』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 安孫子昭二 1971 『平尾遺跡調査報告 1』 南多摩郡平尾遺跡調査会
- 安孫子昭二他 1972 『鶴川遺跡群』 東京都町田市鶴川遺跡群調査団
- 安孫子昭二 1982 『関東・中部地方』『縄文土器大成』3
- 安孫子昭二 1988 『加曾利B様式の変遷と年代(上)』『東京考古』6 東京考古談話会
- 安孫子昭二 1989 『加曾利B様式の変遷と年代(下)』『東京考古』7 東京考古談話会
- 安孫子昭二 1994 『東京・大森貝塚』『季刊考古学』48
- 安孫子昭二 1986 『余山貝塚資料図譜』 國學院大学考古学資料館
- 新原雅明他 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 池上啓介 1933 『広畑貝塚』『史前学雑誌』5-5 史前学会
- 池上啓介 1937 『千葉縣印旛郡白井町遠部石器時代遺跡の遺物』『史前学雑誌』9-3 史前学会
- 大塚達朗 1983 『縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1)-最近の成果と新たな分析-』『考古学研究室研究紀要』2
- 大塚達朗 1986 『型式学的方法 加曾利B式土器-磨消縄紋土器群の分析-』『季刊考古学』17
- 大塚達朗 1989 『加曾利B式三細別に於ける顔輪の解消-学史的理解とは何か』『先史考古学研究』2 阿佐ヶ谷考古学研究会
- 大塚達朗 1990 『失われた書物を求めて(1)-加曾利B式研究から見た昭和考古学-』『利根川』11
- 大塚達朗 1992 『失われた書物を求めて(2)-加曾利B式研究から見た昭和考古学-』『利根川』13
- 縄文セミナーの会 1996 『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』〔同一記録集-1〕
- 埼玉県立博物館 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書-人工遺物-総括編』 埼玉県教育委員会
- 斉藤弘道 1996 『東関東』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 品田高志 1996 『新潟県』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 菅谷通保 1996 『南関東東部の様相』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』
- 鈴木一男 1992 『石神台』 大磯町教育委員会
- 鈴木正博 1979 『取手と先史文化』上巻 取手市教育委員会
- 鈴木正博 1980 『大田区史(資料編)考古II』 東京都大田区
- 鈴木正博 1981 『取手と先史文化』下巻 取手市教育委員会
- 鈴木正博 1984 『下総奉免安楽寺貝塚の加曾利B1-2式について』『下総考古学』7
- 鈴木正博 1987 『大倉南・武田新・古原-千葉県先史遺跡の再評価事始-』『古代』83
- 寺田兼方 1964 『西富貝塚発掘調査報告』 藤沢市教育委員会
- 西田泰民 1989 『塚之内・加曾利B式土器様式』『縄文土器大観 後期 晩期 縄文』
- 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 林克彦 1996 『群馬県』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 百瀬長秀他 1988 『八窪遺跡』 長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬長秀 1996 『長野県』〔第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相〕〔同一記録集-1〕
- 山内清男 1939 『加曾利B式(古い部分)』『加曾利B式(中位の古さ)』『日本先史土器図譜』Ⅲ・Ⅳ集(再版・合冊1967所収)
- 横尾藤雄 1991 『東京都町田市 真光寺・広袴遺跡群V』 鶴川第二地区遺跡調査会

## 4. 石器

本遺跡から出土した石器のなかで、特筆に値すると考えられる砥石類に関して整理しておく。

砥石として器種分類されたのは、有溝砥石を含めて27点である。そのうち明らかに本遺跡の主体時期・縄文時代後晩期に該当しないのは、3点(第81図1~3)のみである。また、形態上は砥石と分類できないが、石器観察によって使用痕跡から機能上砥石として二次的に把握できるものが17点確認できた。二次的な砥石とは、他器種から砥石に転用されたと考えられるもの[A類]、他器種と複合機能をもつと考えられるもの[B類]の二種類を指す。従来この分野の分析は十分になされていないために、比較検討に値する資料に乏しいのが現状である。したがって、課題を提示する観点から整理するものである。

### 有溝砥石

砂岩製で、被熱赤化したものが目立っている。溝自体の残存状態は、両面に彫作られたもの(第80図1~4・6・7)、片面に彫作られたもの(同図5)の二つに分けられる。後者の有溝砥石は、第30号土坑からの出土で晩期の所産である。それ以外は、加曾利B2式期と捉えて大過ないであろう。また、第3号住居跡から出土した異形の砥石(第37図15)は、表裏面に緩い窪みか認められ、本器種に分類できる要素を有しているが、両側縁の磨耗部を主体的に見てとったほうが、形状から考えられる「手持ち用」砥石をよく説明するであろう。対象物を研磨するために、両側縁を第一に使用するものとして製作された砥石であろう。類例は、第80図8・13であろう。結果として、形を変えノッチ気味に磨耗部が広がったのであろう。異形部に見られるV字状の溝は、手持ち用に紐をかけるのに使用されたものと思われる。

本遺跡で確認できる有溝砥石は、欠損している点に大きな特徴がある。欠損した状態で残存していると考えられるのは5・6の二点で、1~4・7は欠損後も使用している形跡が窺える。

なお、7は幅広の溝が残ることから玉砥石であら

う。

他は本調査区からの物的証拠は判然としないが、骨の加工に供されたものと考えられる。

### 砥石

研磨痕が顕著に認められ、形態と使用痕跡から見て、研磨行為が結果として第一義と考えられるものを本器種に分類した。

有溝砥石と同じように砂岩系の石材を主体に使用している。第37図13・16の第3号住居跡出土のやや大きな置き砥石と考えられるものは、軟質の片岩系石材を使用している。手持ち用と考えられるのは、第80図8・9・13で砂岩製である。被熱赤化の比率も高い。被熱現象は砥石類に顕著に見られるようだが、その多くが被熱素材をそのまま使用している傾向が窺えるが、第80図11のように、被熱素材を分割して剥片様にしたものを使用している例もある。

本器種には前述したように二次的な砥石が見受けられる。[A類]に属するものは、第37図14・第80図12・14・19で、特に19は磨石からの転用と考えられ、両端折断後に正面の上下に意図的に剥離面を施し、剥離面が消失するほどに研磨した様子が看取できる。また、他器種に分類したが[A類]の要素をもつと考えられるのが、第37図8・第38図11・12・第79図9・第82図5・第84図1などである。[B類]に属する代表的なもの、第80図10・17・第82図15・17・第83図6・11・12などで、石材は一部を除きほぼ砂岩系に絞られているように見受けられる。[B類]の二次的な属性は、複数の機能を併せもつ点にある。被剥離の痕跡や研磨痕跡の様子から、主に敲く擦る機能が先行し、次の行為として研磨が実施されたものと考えられる。第82図15・17は置き砥石ともいえるものであり、大きな打剥面の剥離縁辺の磨耗が激しいことから、鋭利な縁辺を利用して研磨が実施されたものであろう。湾曲した広い磨面は、研ぐためではなく、擦るための作業面と思われる。

[A類][B類]ともに、獣骨類の折断と加工に関連

する道具と推定される。スパイラルフラクチャーと認められるニホンジカ中足骨の出土と、第87図の骨角器の出土は、その証拠の一端を窺わせる。

所属時期は、第80図9・10が晩期、第81図1～3は晩期以降である。他はおおむね加曾利B2式期に該当するであろう。

以上のことから、重要と思われることについて要点を述べる。

本遺跡出土の石器そのものが欠損品が多いが、砥石類もその例に漏れない。他器種から転用した砥石は、もちろん欠損後の再利用である。他器種と併用の複合石器といえる砥石は、同じ欠損後の再利用であっても、あえて折衝や打刺したり、剥離面を作出したりして砥石の形態を整え、また、使用しやすい作業面にしている。主に敲く擦る機能が先行し、次の行為として研磨が実施されたと想定されるが、見た目形態上欠損に見えても、それは研磨機能を意識した上での結果であり、ただの再利用ではなく、完成品に仕立て上げられたものといえよう。

砥石類自体の属性として認められることは、第一に砂岩系の石材を主体にしていること、第二に被熱傾向が顕著であること、第三に折衝面打刺面や剥離面の縁辺部を研磨作業面として使用している例が目立つことなどが上げられる。石材に関しては、砥石が生活道具

として使用されはじめた縄文時代草創期段階からの普遍的な選択といえるだろう。加曾利貝塚出土の砥石は、すべてが第三紀砂岩である(注1)。素材の被熱化に関しては、原材料の自然赤化との分別が課題となり、一般論を述べることはできない。とりあえず縄文時代後晩期に顕著に認められるものと理解しておいて大過ないであろう。最後の研磨作業面に関しては、今日まで研究成果が提示されていない領域であり、比較検討の一例にはならない。なお、この第三の属性については、使用とは無縁の磨滅や風化、ローリングなどにも注意しなければならないだろう。

今一つ着眼しておかなくてはならないことを指摘したい。本遺跡での獣骨片の出土量の多さと砥石用途に関する研究の趨勢から、獣骨加工と砥石類との関連を追認する報告となったが、縄文時代後晩期に特徴的に見られる石棒・石剣・独鈷石などの磨製の呪術具の製作時に大きな役割を果たしたとする見解にも注意しておく必要がある(注2)。

(注1) 千葉市立加曾利貝塚博物館 1983 『縄文時代の石器—その石材の交流に関する研究—』

(注2) 宮下健司 1988 『縄文時代の道具 砥石』  
『長野県史 考古資料編全一卷(四) 遺構・遺物』